第33回　特別研究会

「全てのいのちを育む地球社会を模索して」

平　山　　恵

１９９７年3月１７日　　南山短期大学にて

■ 特別研究会

「全てのいのちを育む地球社会を模索して」

平山　恵（ひらやま・めぐみ）

1983　関西の環境市民団体「地球人の会」の運営を皮切りに国際問題と居住地域の問題に平行して取り組みはじめる
1986　国連欧州事務所（ジュネーブ）インターン
1987　世界保健機関（WHO）でカリブ海に保健教育情報官として駐在
1990　㈶国際開発高等教育機構に勤務する傍ら、国際保健協力市民の会（SHARE）のボランティアスタッフとしてカンボジア・プロジェクトを担当
1993　若手僧侶と共にアーユス＝仏教国際協力ネットワークを設立し、初代事務局長を務める
1995　9月より10カ月間、ハーバード大学客員研究員。帰国後、フリーの国際協力コンサルタントとしてNPOおよびCBOの組織づくりに取り組み現在に至る。新潟県地域づくりアドバイザー、名古屋の環境NPO「ワン・アース・プロジェクト」顧問も務める。また、1992年より東京大学国際保健学講師、1995年より南山短期大学人間関係科で国際協力論を教える。
著書：『『草の根』保健活動の評価をどう行うか」本田徹氏と共著、国際保健協力市民の会、1993）
「小規模社会開発プロジェクト評価－NGOの試行錯誤」共著、1995）
「入門 社会開発」第13章政策提言－NGOによる政策活動の役割、国際開発ジャーナル社、1995）

伊藤：人間関係研究センターの特別研究会を平山恵先生をお迎えして、「全てのいのちを育む地球社会を模索して」という題でお願いしたいと思います。先生のことについては、ご存知の方もいらっしゃるかと思いますけれども、一応ご紹介申し上げます。１９８５年から'８７年まで2年間 School for International Training でご研究をされ、そこでマスターをお取りになり'８７年から'８９年までＷＨＯのお仕事、それから'９０年から'９３年までは国際開発高等教育機構でお仕事をなさいまして、'９３年からはアーユス国際協力ネットワークなどの事務局のお仕事をなさりながら、あちこち飛び回っていらっしゃいます。昨年１年間ハーバードでご研究、ご研修といいますかなさって、今年の７月末ここに授業にいらっしゃる直前までいらして、お帰りになってから集中授業をしていただきました。人関には２年間集中で国際協力論という授業をお持ちいただいております。今日は小さいこじんまりした会になりますので、先生にご準備いただいたものをお話しいただきながら、どちらかといえばインフォーマルに進めさせていただきたいと思います。先生のご希望ですが、時々慣れない言葉があったり初めて聞くような言葉があるかもしれないので、そのことについては随時質問をして下さい。それでは、先生よろしくお願いいたします。

■日本での異文化との出会い

平山：ありがとうございます。こういう機会をいただいて、いろいろコメントいただければありがたいと思います。

まずは本当に私事からですが、どうして国際協力に入っていったのかという

のは非常に私にとっては大事なことなので、話をさせていただきたいと思います。もともと国際協力の仕事をしようということは全然思っていませんでした。ご存知の先生方もいらっしゃると思いますが、『何で英語やるの』という本をお書きになった中津燎子先生に１５年くらい前にお会いしまして、彼女のところに弟子入りをしたんです。それは未来塾という塾なんですね。実際はそこに弟子で集まった人は、英語の発音が良くなればいいということで集まった方もいらっしゃいました。テーマは異文化間トレーニングとなっていました。私が教わった時、先生はちょうど還暦をお迎えになったころでしたが、非常に厳しい先生でどんどん弟子を破門されるというような状況でした。具体的にどういうことをしていたかといいますと、まずアルファベットを半年間くらいかかってマスターするということでした。私は１カ月間、一番初めの音がＢという音なんですが、Ｂが１カ月間パスしなかったという大変な授業でした。それは「異文化間トレーニング」という名前は付いていましたが、単にその発音が良くなるという話では全然なかったんです。実際どういうことをしているかといいますと、全員が鏡を持ってきて自分の舌の厚さとか唇の厚さを見てそれぞれが違うということをまず発見するのですが、音が違うというのがやっぱりわからないんですね。その中から異文化を感じる。結構思い込みがあって、自分はこのＣという音を出してるつもりなんですけど違うという。１年間アルファベットで終わるわけです。私はまず６カ月通ったのですが、６カ月目に破門されまして、半年間をおいてまた２年目をやり直すということをしました。次の２年目の６カ月はめでたくアルファベットが通りまして、その次に何をさせられたかというと急に朝鮮語をやらされました。皆訳がわからなかったんですが、朝鮮語が終わったところで感想文を書きなさいと言われ、結局なんだかわからないうちに終わってしまいました。１年間終わってハッと気づいたのは、一人一人違うということですね。体の骨格が違う、骨の大きさが違う、何でもないことなんですが、そこで一つの大きな異文化を発見したんです。これは実際にやってみないと言葉では表せないところなんですが、一度ぜひ『何で英語やるの』というのを読んでみて下さい。このトレーニングに来る人は、中学位の英語のレベルから、ペラペラという方から、それから音声学をやった人まで来るんですが、全部それはゼロにして戻してやらされるという変わった塾でした。

次に、朝鮮民族学級との出会いがありました。ちょうど大阪で高校生のカウンセリングをやっていたのですが、彼らの問題というのは、結局いい大学に入っても就職口がないという状況です。ですから、どうしても高校に行っている間にドロップアウトが出てきます。一番大きな問題は彼らが日本の暴力団に取りこまれてしまうことです。一番下の方で抗争しているのはその朝鮮人の高校生たち、トップは日本人だということで、結局私が暴力団と高校生の間に入るような羽目になりました。その一方で、その子がどういう環境で生活しているかを知るために家庭訪問もしました。訪ねてみると飲んだくれの親父さんがいた

り、親がいなくて朝鮮人のおばあちゃんをその子が新聞配達をして生活を支えているという状況がありました。私自身も“お前日本人でわからないだろう”と言われ、どうにもこうにもできなくなっていました。そこで、そうだ中津燎子さんからちょっと朝鮮語を習ったなと思い出し、朝鮮語の勉強を始めました。というのも、朝鮮人が多い区域に大阪の生野区があるのですが、例えば生野小学校、その当時は１５年くらい前ですが、８０％が在日朝鮮人の子どもでした。生野区のある部分では日常的に朝鮮語が話されていて、日本人が行っても何を言っているのかさっぱり分からないというところでした。ですから、その状況をつかむ為に朝鮮語を始めたのです。朝鮮語を始めていろんなことが見えてきました。ここの朝鮮民族学級というのは、さっき言った生野区の小学校、８０％が在日朝鮮人の子どもですが、大人になっていったときに選択の余地があるか、つまり朝鮮半島に帰れるかというと、言葉ができない、文化の問題も大きいということで帰れない。そのうえ日本では就職がない、ということで生きようがないという状況がよく解ってきました。そこでは、小学校の普通の授業が終わってから、朝鮮民族学級が朝鮮人講師の先生によって行われていました。例えば朝鮮の焼き物を作ったり、言葉を勉強したり、音楽を鳴らしてみる、ダンス、踊りをやってみる、そういう学級があったんです。これは非常にいいことだと思ったのですが、実はこれが自然消滅させられかけていました。なぜなら講師はずっと講師という身分のままで、６０歳近くになっても給料は同じです。そんなところに就職しようという人は非常に少なかった。また、朝鮮民族学級の子どもたちが作った焼き物がよく割られてしまうからです。つまり、いつの間にか誰かが入ってきてぼろぼろにしていくという状態で、講師の先生もいやになっていたという状況がありました。そこで、私たち朝鮮問題に少しずつ関わっていった人間が、大阪府の教育委員会にもう少し給料を上げられないかと初めての市民運動を始めたことも、取っ掛かりになったのではないかと思います。

その次に、少し朝鮮語ができるようになって猪飼野の部落に入っていくんですが、そこではオモニ・ハッキョに加わりました。オモニというのはお母さんで、ハッキョは学校のことです。日本語ができないお母さんの識字学級をやっていました。ここで夜間中学の先生たちと話をしているうちに、また問題が見えてきました。夜間学校の先生は、とにかく“朝鮮人は頭が悪い”と言うんです。“何回言っても日本語の発音ができない”というような話を何回も聞きました。この猪飼野での経験は、私が第二番目の異文化に突き当たったものです。ですから海外で異文化に突き当たったのではなくて、日本の中での異文化が非常に大きかったのです。

次には、先にもお話ししたのですが、高校に入って朝鮮人の子どもたちは暴力団に取られるという問題です。

それから、今度は日本側、日本の社会の問題です。その頃ちょうど自分が勤

めていた高校から近い高校で、３年生の子が自分の親友を殺すという事件がありました。親友は大学に受かったけれども自分は落ちたという、大変単純な理由です。ちょっと待てよ、と思いました。自分の働いている高校の中では、異文化を教える為にいろいろな仕掛けを作っていたのですが、自分の学校だけを見ていても、このより大きな問題に対して何かしないといけないのではないかと思い、これがきっかけになって海外に出ることになりました。ここで School for International Training に、星野先生と同じ学校に行くことになりました。学校を探している時、フィリピンの学校に行こうか、朝鮮の学校に行こうか、英語と朝鮮語くらいしかできないのでいろいろ迷いました。アメリカは考えていなかったのですが、資料を見ていたら学校の中にいろんな国籍の人がいる学校がある、それがＳＩＴ、School for International Training でした。ここで津村先生にお会いしました。

もう一つ日本の中で私が問題視していたものがあります。猪飼野に行っている時の経験です。ここには、いろんな朝鮮問題に関わる人たちが釜が崎というところから来ています。釜が崎というのは日雇い労働者の日本で最大の地域なのですが、そこでは１２月頃パトロールを始めます。その頃凍死者が出ていたために、１２月のクリスマスの時期だけでも凍死を避けようということで活動しました。そこで大きな衝撃を受けた事件がありました。そこにはいろんな飲んだくれのおっちゃんたちが寝ていまして、その人たちを仮の宿にどんどん入れていくんです。その中で女の子が一人歩いていました。ああこの子もなんとかしないと、この寒い中をずっと歩いているなと思って、後をついて行きました。そうしたら、パチンコ屋に入って行ってそこでパチンコの玉を拾っているんです。で、大人たちに売っている。そのお金を持ってパン屋に行ってパンを買ったんです。私はその時、この子はお腹が空いていたんだと思ったのです。ところが違いました。この５歳の女の子が、病気のお母さんを食べさせていたんです。つまり、日本にもこういう問題がある、その日本の歪みに気がついたのです。そういうところから日本の中での異文化とか、自分の知らないことへの気づきがありました。それが今の私のスタートだったんじゃないかなと分析しています。

■海外での国際協力の体験から

タイ

平山：ＳＩＴで勉強をした後、ジュネーブの国連でインターンをしました。その後、伊藤先生がご紹介して下さったようにＷＨＯでカリブに行ったり、その後もいろんな国に行くことになりまして、この間イラクで４０カ国になりました。働いた国が４０カ国です。一昨日ちょうどベトナムとタイから帰ってきたばかりですから、そのお話からしたいと思います。今日は変な格好をしていてちょっと見苦しいのですが、これは飾りでやっているのではなくて、はずせな

い理由があるんです、といいますか、はずしてはいけないんです。ご存知の方いらっしゃいますか。タイのラオスに近いところでは、新しいお客さんが来て親しくなったら、最後の別れのときに儀式をやってくれるんです。一人一人が歩み寄ってきて一本ずつこの紐を付けてくれます。全然タイ語が分からなかったので何を言っているのか分からなかったんですが、何かまじないを言って付けてくれます。これは絶対切ってはいけないんです。爪楊枝で一つ一つはずさないと不幸が起こるということです。私の前に行った友人が、ちょうど暑いときなのでパサッと切ったところ、切ってすぐパスポートを取られたそうです。ですから、最低5日は絶対に取ってはいけない。5日目に取るときは、一個一個爪楊枝ではずせと言われています。半分くらい取ったのですが、時間がなくて、途中で止めて帰ってきました。

今回よかったことは、エイズの患者さんとずっと向き合えたことです。ホスピスではなく、エイズの人たちが普通に生きているコミュニティがどういうふうに動いているかを見に行って、一緒にいろんな話をしながら日本ではどうかという意見交換をしてきました。そこでずっと一緒にいて非常に仲良くなった３３歳くらいのワッサナさんというタイの女性がいるのですが、旦那はトラックの運転手で、売春宿に入ってエイズに感染しました。二人目の子どもは母子感染で、生まれてすぐにエイズで死んでしまったそうです。もちろん彼女自身もエイズにかかっていますが、旦那は逃げてしまったという状況でした。私の前に入った日本人の男性がエイズに何とか取り組みたいということで、ずっと彼女と会話をしていました。どういうふうにして会話をしているのかを見たくて、今回は付き合わせていただいたんです。本当に普通なんですね。薬草で何とかエイズを抑え込めないかという活動をしているＮＧＯの民間団体のプロジェクトでした。タイの食事というのは一つのお皿の中にいろんな葉っぱがあって、皆で食べていくんですけれども、実際に私も一緒にご飯を食べました。そういった形で薬草を食べるのが普通なんだな、という感じがよく分かってよかったです。一方、北タイから今回私が行った東北タイに逃げて来たエイズの女の子がいました。彼女のいたの北タイの村では、例えば家族でエイズ患者が死ぬと、その患者さんが寝ていた布団を燃やさないで川に流すそうです。その為に魚がエイズの感染を受けるということで、その村では川の魚は食べないという風になってしまったそうです。だから北タイの人は、これまでは川魚を街へ持って来て売るということをしていたのですが、収入がなくて大変なことになってどんどん貧困に陥っているというわけです。この東北タイの六つくらいの村に今回滞在したのですが、六つの村の明るいエイズ患者と北タイの暗さの差はすごく大きいのです。

ワークショップは、ずっと日本の男性がやっているのですが、それだけでもこんなに人が助かるんだということを理解しました。“エイズは普通では感染しない”ということを言っているだけなのですが、それだけでこんなに社会が

明るくなるということを今回身を持って感じさせられました。今はまだまだ北タイどころかタイ全体でも、エイズ患者が出ると家を追い出されてしまい、お寺やホスピスに入っている人で一杯の状況なんです。このワークショップをやるというのは、私の授業で少しずつ取り入れていますが、例えば人間関係科の学生が行って、エイズの基礎的な知識について話すだけでも、それだけ違っていくのだと思います。これは医者じゃなくても誰でもできると思うんです。では言葉はどうかというと、私はタイ語はやっていなかったのですが、向こうに行ってずっと一緒に生活していく中で、意識的に言葉をピックアップしていったら、かなり会話ができるようになりました。少なくとも英語よりは難しくないなという感じがしました。

ベトナム

平山：一方、ベトナムはまだまだ社会主義の影響で、少しの移動にもいろいろ問題が生じますし、こちらがエイズの話をするにもかなり規制があります。けれどもそこでおもしろいと思ったのは、エイズもガンもなんですが、アート・芸術でもう少し Quality of Life を高めようという活動をしていたことです。お医者さんがフルートを吹いたりギターを弾いたり病院の中でやっているんです。彫刻をやったり。今回の中で、非常に印象的でした。

カリブ

平山：もう１０年前の話になってしまいますが、'８７年から'８９年までカリブに２年ちょっと駐在しました。カリブの中のアンティグアバーブーダという人口８万人くらいの、１９８１年に独立した国に駐在していました。私はいつもラッキーなのかなと思うのですが、珍しいことに日本人が一人もいなかったんです。例えばアメリカに住んでるとき、ジュネーブに住んでいるときは一日一回は日本人に会うために、頭の中も日本語になるということがあったのですが、２年ちょっとの間全く日本人に会いませんでした。それもそのはずで、私は最初で最後の日本人だったんです。今月、第２番目の日本人が入られるそうです。クリスチャンのシスターだとうかがっています。

ここで学んだことは、地域で子どもを育てるということです。例えばある家族が薬屋さんを経営していたとします。そうすると子どもに継がせるのかというとそうではなくて、隣の子の方が向いていたらその子に継がせてしまうのです。また、これは歴史的背景があるのですが、生まれて親がすぐに死んでしまうこともよくあるので、生まれたときに複数の親を決めておくんです。それは別に血縁関係でなくても近所の人で構わないんですね。お母さんが５人位、お父さんが５人位いて、その子が問題を起こしたら親たちが協議して、がやがや話し合うわけです。誰が怒るかは決まっていません。これはなかなかいいな、これは日本に逆輸入したらおもしろいなと思いました。こういうところに社会学や人類学の調査で入って人間関係を見たら、非常におもしろいと思います。

ここでの私の大きな仕事ですが、ここは災害ハリケーンがよく来ますし地震

もあるところなのですが、実際保健上は何が問題かというと、非常に単純な話で、地震が起きたら例えば小学校だったら二階から皆飛び降りちゃうわけです。それで骨をボキボキ折ってしまうことが問題なのです。日本だったら何回も予行演習をやっていますから、そんなことするわけがないんです。普通はハリケーンで飛ばされて怪我をするのかなと皆さんお思いになるのでしょうが、そうではなくて、ちょっとの知識があれば防げるのに、皆ボキボキ折ってしまう。その指導が、私の仕事の一つでした。それから、家の建て方の指導もしていました。引越しをするときにトラックに乗せて運ぶくらい、軽くて簡単な家が建っているんです。しかも、家を建てるときの土台の石が丸くなっていて、この上に建てるから家が傾いてしまいます。ですから、ハリケーンが来たら家がコロコロ転がってしまう。それをきっちりしなさい、それだけでもかなり怪我人を防げる、そんな単純なことばかりやっていました。でも実際、私も被災してしまいました。ハリケーンが来て、国連のオフィスの中にいたんですが、なんと国連のオフィスの屋根がポーンと飛んじゃったんです。だから屋根はきっちり造りなさいと指導していました。ここで何が言いたかったかというと、私はカリブでＷＨＯの仕事をしましたが、これは誰にでもできる仕事だということです。衛生教育にしても、手を洗うということをきちんとやるだけで、かなりの下痢症の子どもたちが救われるんです。今世界で一番多いのは下痢で死ぬ子どもたちですから、それを救うことは誰にでもできるんです。国際協力、例えば栄養協力は難しく考えないで、人を見るとか、何が問題かということを自分で考え、そしてそこの住民にも考えてもらうような仕掛けをする、というのでしょうか。そういうことができたらいろんな問題が解決します。仕掛けというのも、これも人間関係科と関係があるような気がします。

次にマッピングというのがあるんですが、何をやるかと言いますと、ただただそこの住民に地図を作ってもらうことです。何の地図かというと、ここには薬屋さんがあります、ここには呪い師がいます、ここには薬草が生えています、それからここには災害予知ができるおじさんがいますよ、というそういう地図を作るんです。そうすると何か起こったときにパッと行けるわけです。何がどこにあるかということは、なかなか把握できないんですね。地図を書くというのは非常に難しいのですが、皆で書いていると、例えばＡさんは知らないけれどＢさんは知っていることがあります。それをシェアリングしていきます。そして、このマップを一枚持っているコミュニティでは、様々なことに対する予防ができるんです。一つの村でやると、隣の村からうちも来てほしいと呼ばれるわけです。次の村へもまた地図作りに行って、次もまた地図作りに行って、ということをやりました。これをマッピングというんです。これはなかなか楽しいし、効果がある仕事でした。

伊藤：それは住民の方が一緒に協力して作られるわけですね。

平山：ええそうです。なかなか地図っていうのが難しいんですよね。

グラバア：地図という概念はあるのですか。

平山：ええ、一応カリブにはあるんですが、なかなか地図を読めない人もいました。そこは自分のコミュニティなんで、足で歩いて行って、ここまで来ましたねと言って一緒に書きながら作りました。例えば左の端の通りをやったら、次は自分がやる自分がやるという人が絶対出てくるんです。やってみると、右と左をよく間違うんです。

また、これをやっていてわかったことがあります。今度は何年か経ってアジアに帰って来た時ですが、ここでは大きな問題として住民移転がありました。タイではダムを造るために、政府がユートピアみたいないい土地に、天国村みたいな名前を付けて、ダムの建設予定地の住民たちに移転しなさいというようなことがよくあるんですね。実は、ここは非常に整備されているんです。水もあるし、いいところなんです。ところが問題は、見えないところで失っているものがあるということです。移民の中には自分の住む村の地図が自然に頭の中に入っている人々がいます。彼らは、移転によってその地図が使えなくなった為に、どこに行ったらいいかわからなくなります。だから住民移転の問題というのは非常に大きくて、いくらいい場所に移っても問題は起こるんです。年をとった人の場合だと、実際の地図がなくても“ああお腹が痛いからあの呪い師のところへ行こう”と自然に体が動いているわけです。けれど移転によってそれがなくなることで、早く死んでしまうということがわかったんですね。この住民移転というのは、国際協力で大きな問題になってきています。このマッピングをやっていて、これはやっぱり大事なことなんだなと、よくわかりました。

大森：じっさいに地図を書いてみてわかるというのか、あるいは意識的にわかろうとしなくてはいけないくらい広い、そういうことなのですか。ここに呪い師がいるとか。村の規模はどうなんですか。

平山：村の規模はいろいろあります。書かないとわからないかということですが、覚えているところもあるんですけど、全く知らないところもあるんですね。だからAさんは知っていてもBさんは知らない、皆で地図を書くことによって、もっといろんなところがわかってくるということです。

大森：そうすると、今想像があまりできないのですが、我々でも近くにここに何があるかわからない場合がありますね。だけど、そういうところは一様な土地というのではなくて、いろんな起伏があったりとかして、それでよくわからないというようなことも関係してくるのでしょうか。

平山：行ったことがないとか、それから男女で知っていることがずいぶん違います。

大森：ということは、行動範囲というのはあんまり広くないということではないのですか。

平山：もっと詳しく調査すれば多分統計が出せると思うんですが、教育程度によって歩いている距離が違ったり、男女の差が大きいんですね。カリブはまだ

ましだと思いますが、例えばバングラデシュだとさらに差は大きくなって、女性は何がどこにあるか全く知らない。バングラデシュの場合、女性ばかり集めて地図を書いてもらって、男の人が書いた地図と比べるんです<資料2>。やっぱり違ってくるんですね。意識の問題もあるし、ジェンダーとか、職業によっても違うし、やっぱり教育によっても違う。

伊藤：だから自分の情報を皆に分かち合っていくという発想がないというふうに考えてもいいんですか。今は私たちの社会はすごく情報が有り余るほどあるから、当然のこととして私たちの地図があると考えるのですが、それではないわけですね。

平山：ないですね。ですから、地図がそこにあるということがないのです。

伊藤：だから非常に個別化された自分の体験で留まっていると考えたらいいんですか。

平山：そうですね。

山口：今の都市生活では地図づくりは誰かがやってくれているだけなんですね。タウンマップとかいっぱい出ていて、おいしいもの屋さんの場所だとかにそれを見ながら行くというのと同じことだと思うんですね。

平山：先生がおっしゃったように、隣の隣に薬を持っているおじさんがいたとしても、それを知らずにもっと遠いところに行っていたということがあるかもしれないですよね。それをシェアリングしていくという形でしょうか。このカリブの場合は貧しさによって情報が違うと思うんです。貧しい人たちは教育も受けられないので、情報も少ない。そうすると、情報が少ないから薬を持っているおじさんのところにも行けなくてやっぱり早く死んでしまう。貧しさが健康にも影響しているんですね。なかなか現場の写真がないのでわかりにくいと思うんですが。

ところで、ここでちょっとクイズなんですけれど、これはどこの服でしょう。この手首に巻いてある紐はタイなんですが、このポンチョとブレスレットは同じ国ので合わせました。

山口：そういう、かぶる服はペルーとか？

平山：これは実はグアテマラなんです。グアテマラの山の方です。中米でもグアテマラだけがよくよく見てもらったらわかるのですが、衣装がカラフルなんです。他の中米の国になると、いわゆる民族衣装というのはなくなります。中米というと、結構十把ひとからげにとられるのですが、グアテマラはちょっと違うんですね。私はグアテマラでホームステイをして、スペイン語の学校に通いました。スペイン語の授業料が非常に安いのでお勧めのところです。たまたまその都市の名前がアンティグアといって、スペイン語で「古い」という意味の昔の首都です。飛び込んで行ってもすぐにスペイン語の授業が受けられるというところでした。グアテマラでスペイン語を勉強したのは'８８年でした。カリブへ行っている途中で１カ月休みをためておいて、グアテマラにスペイン

語を勉強しに行きました。ただし私の目的はニカラグアでしたので、その後ニカラグアでホームステイをしました。グアテマラは民族衣装では特徴的だと申し上げましたが、中米の中でのニカラグアというのもちょっと特異な存在です。最後までオルテガがアメリカになびかなかったということから“中米の赤い星”と言われて、キューバと横並びにされていたところです。私も、中米は皆同じだろうと思っていたのですが。

ニカラグア

平山：グアテマラの授業が終わってバスに乗って国境を越えてエルサルバドル、ホンジュラスというふうに降りて行きました。

最後にニカラグアに入ってホームステイしたのですが、グアテマラもエルサルバドルもホンジュラスも、やっぱり皆アメリカになびいてしまっていて、共産主義の人たちは皆レッドパージにされて、自由な国なんだけれども、どこかビクビクしているような感じがしていました。ニカラグアは中米の中でも一番貧しい国です。実は私がニカラグアに行った理由は、「解放の神学」の神父さんを訪ねたかったからです。彼らが、どうしてパウロ二世に破門されてもああやってがんばって、貧しい人たちと苦境に立ち向かっているのかを見たかったのです。

解放神学をやっている神父さんたちは本当に温かい人だったのですが、その前にニカラグア全体が非常に温かいんです。私のような日本人は非常に目立ちます。お金が歩いているように見えるくらいなんです。ニカラグアでは、例えばバスの乗り換えとかが全くわかりませんでした。本当に困りました。さっきの話しではないですが、まともな地図がなく、地図があるところでも、実際と全然合わないんです。地図という点では、首都からして全然だめでした。ですから迷いっぱなしで、バスもどうやって乗るかわかりません。そうすると、誰かがすぐに教えてくれたり、私の方がお金持ちのはずなのに乗車券をくれてバスに乗せてくれたり、非常に助けられました。ですから、貧しさが問題なのではないと思いました。長く発展途上国に関わってきて、貧困というのが最大の問題だと自分では思って来たのですが、“それは違うんだな”ということをここで気づかされました。ニカラグアは一番音楽が多かった所だし、詩人がたくさん生まれている所でもあります。冒頭にベトナムでアートという話をしましたけれども、ここニカラグアでも芸術は生きる力になっているというのでしょうか。生きる力というものを、ニカラグアでは非常に感じさせられました。

カンボジア

平山：カリブに行って中南米に行って、日本へ帰って来て、今度はシェアというＮＧＯでカンボジア、タイに関わり出したのですが、ニカラグアとカンボジアとは似たところがありました。ご存知かも知れませんが、カンボジアが日本の民間協力を育てたといっても過言ではないんですね。国際協力というのは大きく３種類に分かれます。よく新聞で取り上げられるＯＤＡ政府開発援助、マ

ルチという国際機関の協力、ＮＧＯの３つです。政府対政府で、これは一応 bilateral 等といっていますが、二国間援助というんですね。よく国連の協力のことをマルチというんです。いろんな国が出資してそれでプロジェクトを行なっています。この分類は非常に重要で、例えば政府の問題だと日本とタイで協議して決められるわけです。国連の場合はいろんな加盟国があり、いろんな意志があり、私が国連やＷＨＯにいたときに非常に大変だったのは、価値観がそれぞれに違っていてどれが正しいかということがなかなか決められないことでした。日本の場合は、どっちがよいかということは序列が決まっていて、すぐに決まります。ＮＧＯに関しては、日本にもたくさんＮＧＯができましたが、これはもっと複雑といいますか、より意志決定が難しくなります。いろいろな考えの人がいて、日本人のように同じような考え方をしている人たちの集まったＮＧＯであっても、いろんな意見がでます。何にも強制されません。

国際協力とのかかわり方

平山：今度はカンボジア、タイに関わった話をしたいのですが、その前に国際協力との関わり方というのを少しお話ししますと、例えばＯＤＡだったらＪＩＣＡっていう国際協力事業団であるとか、青年海外協力隊ＪＯＣＶでしたら国の援助ですから、いったん青年海外協力隊に入るとそのままＪＩＣＡに行かれるという人もままあります。もっといえば、ＪＩＣＡに入ってしまったらずっとＯＤＡで通されるという人もいらっしゃいますし、国連にいったん入ったらやめないでずっといるという人もいらっしゃいます。私の場合は、ラッキーなことに３つを回ることができましたので、いいところと悪いところが認識できるようになりました。今は仕事の中で、それら複数の形態の組み合わせで国際協力ができないかと工夫しています。ＯＤＡとＮＧＯでＯＤＡＮＧＯ（オダンゴ）といっています。ＯＤＡＮＧＯプロジェクトです。６カ月程、外務省とＮＧＯの間をうろちょろしているのですが、両者間のコミュニケーションが全然とれていないということがわかりました。お互いに考えていることが全然違うのです。扱っているお金が全然違いましたから。１億円の病院を建てているところと１０万円でクリニックを建てているのところの差は大きいんですね。でも一応私たちは納税者なので、もう少しお金を使わない病院を建てるとか、意見を出すことも必要です。ある地域に１億円の病院を建てたものの、水が出ないところに建ててしまったために誰も入っていない、ということは今でもあるんです。１億円あればＮＧＯのプロジェクトがいくつできるのかと考えてしまいます。先ほどお話ししたようなマッピングをたくさんおこなったり、人をどんどん送り込めばどれだけの人が救われるのかと思うと私はちょっと残念で、何とかこのお金をＮＧＯにとか、あるいはＯＤＡの質を上げるとか、今はそういった仕事をフリーで動いているところです。

その一番はじめ、ＮＧＯの活動のきっかけになったのが、カンボジア、タイなんです。先ほどカンボジアが日本のＮＧＯを育てたと言いましたが、’７９

年にカンボジア難民がタイにどどっと流れ込むんです。そこに、日本の学生さんたちが何かしたい、何だかわからないんだけれど何かしたいということで飛び込みました。これが日本のＮＧＯの夜明けみたいなものです。もちろんその前にＪＯＣＳ海外キリスト教医療協力会というＮＧＯが、’６０年代にできていますが、これはまだＮＧＯが市民権を得ていないときです。この時にどっと出て来て、今では御三家といわれるＮＧＯがありますが、日本国際ボランティアセンター（ＪＶＣ）であったり、曹洞宗ボランティア（ＳＶＣ）であったり、そういったＮＧＯがたくさん出てきました。実は、ここで日本のＮＧＯは大きな間違いをしてしまったんです。今では大きな反省材料になっています。この時、皆でどこに行ったのかというとタイの周辺、タイの方に行ってしまいました。難民と認定されるためには国境を一歩出る必要があるんですね。カンボジアにいて困っている人はたくさんいるのですが、難民キャンプは全部その国の外にあるわけです。カンボジア難民キャンプはタイにありましたし、私が行ったルワンダ難民キャンプはザイールにあったりウガンダにあったりして、ルワンダの中にあることはないんですね。国連自身も、カンボジア内にいる以上内政干渉はできないということがあり、国外の方に援助しています。国連も日本の若い人も、よくわかっていないから“キャンプっていうのは大変だろう”といって、皆タイの国境の方へ行ったのです。カンボジア国境に行ってしまった。これがその後１０何年も影響してしまったのですが、ここに援助が集中したがために、カンボジア人は１０何年も難民キャンプで暮らすことになりました。彼らがここを出たくないのは、いつでも物がもらえるからです。はい自転車が来ました、次教科書も来ました、教育も受けさせてもらえます。ここで生まれた子どもたちは生まれたときからもらうことばかりをずっと経験しています。そしてちょうど１９９２年位に難民規定があり、ＵＮＴＡＣと明石さんたちが入ってカンボジアで活動をしました。タイにあった難民キャンプが閉鎖されることになり、難民がカンボジアに帰還してくるんですが、その途中の列車の中から皆逃げるんです。というのは、カンボジアに帰って生活する方が大変だからです。国連は帰還地には水があるということをきちんと調査して、ここにあなたは帰りなさいと言っています。かつ、国連の機関でＦＡＯという農業関係の団体があるのですが、そこは鋤、鍬を渡します。ところが今まで全部もらう生活をしていた人に、はい鋤、鍬と言っても誰もやらないですね。もう一つ問題はキャンプに逃げ込めた人は、国内避難民といわれるカンボジアの中に残った人々よりもずっと教育のあった人たちだということです。いち早く危機を察知して情報を手に入れた人たちです。だから逃げられたし、逃げられる手段を持っていたわけです。貧しい人たちは国外へ逃げることができずに全部カンボジアに残っていて、しかもそのときはアメリカが主導で国連を動かしていたので、日本もそれに右へ倣えしてしまいました。カンボジア国内に援助していた国連機関はユニセフだけでした。カンボジア難民流出ピーク時のカンボジアと

タイへの難民援助の比率は２：９８なんです。実際に援助の必要度が高かったカンボジア国内の方が見捨てられた状態でした。日本のＮＧＯの援助の最大の失敗です。この後も日本のＮＧＯは国境に残って例えば裁縫を教えたり、識字教育をしたり、修理工訓練をしたり、皆キャンプに残ってしまいました。この援助は大失敗だったということで、一つの歴史になっています。しかしこの時になって日本のＮＧＯが出来上がったという背景があります。また国境付近というのは、もともと住んでいるタイの人たちも貧しいわけです。ところがキャンプの中には医師がいて、医療行為はキャンプの方が行き届いているわけです。そうするとタイの人たちが怒り出したり、その辺の木になっている果物を取るとけんかになったりします。もともと貧しい村なのに難民がどっと押し寄せて来て、そこでコンフリクトが起きたのです。これは今のザイールでも、ルワンダの難民でも同じです。もっと大きい話になっています。

さて、'９０年代に入ってから私が関わったプロジェクトは、また保健教育です。何をやっていたかというと、まさにこれだけなのですが、例えばマラリアのハマダラ蚊というのがいます。その頃はマラリアが非常に流行して来た時で、蚊帳を張りましょうとか手を洗いましょうということを、カンボジアである程度教育のある人たちを私たちがトレーニングしていました。なかなか字が読めないので、いろいろな紙芝居を作って１週間に１回やってみるというような教育です。

山口：この辺のことでは、例えばＡＨＩ（アジア保健研修所）などとの関係のようなものは？

平山：ありますね。ＡＨＩの場合はメジャーなＮＧＯとは別の分類になりますが。ＡＨＩの場合は日本へ人を呼びますよね。また第三国研修ということで、カンボジアの人をタイで研修する形で…。

山口：最近はそうなっていますね。

平山：昔はやっぱりこの流れに、もれなくいってしまったんですね。それからＡＨＩの場合は、ＷＣＣ（World Conference of Church）と組んでやっていました。ＡＨＩ独自でやるというよりも、世界の教会と組んで活動していたように思います。ＡＨＩは、日本のＮＧＯの中でも非常に優秀だと思います。それから今のＮＧＯのレベルでいうと、飛びぬけて集金能力がいいです。いろんな教会から資金がきていますから。キリスト教社会が支えているＮＧＯなんですね。ＡＨＩは政府から絶対にお金をもらいません。現在ＮＧＯの一番大きい財源は、ボラ貯という郵便貯金、ボランティア貯金です。その次がＯＤＡ補助金で、後は会費です。ＡＨＩの場合は、ボラ貯も政府補助金もらっていません。自前でやっていますから、政府からあれこれと言われないんですね。自立しているといえば自立していますね。

財源ということで少しお話ししますと、昨日までシェアというＮＧＯの総会に行っていたのですが、去年は利息が下がってボランティア貯金のパイが半減

しているんです。ボラ貯が出来る前というのは自分たちにできるところを細々とやっていました。一人のボランティアがタイに飛び込み、その人をサポートしていたのですが、ボラ貯が出来て、実は突貫工事を始められたのです。非常にありがたいお金で、ＯＤＡ補助金よりもずっと使い勝手がいいんです。どうしてかといいますと、外務省の補助金は政府のお金です。ボラ貯は郵政省が関わっていますけれど、一般の貯金者が「私のお金を使ってください」と言っているわけですから、別に政府や郵政省のお金でも何でもないですよね。だからボラ貯の方がいいわけです。これは非常にありがたかった。それにこのボラ貯は、人に使うことができました。外務省の補助金はハコモノなんですよ。車を買いなさい、クリニックを建てなさいという風で、見えないものだと外務省が会計監査で非常に困ってしまう。ボラ貯は人の派遣費もＯＫです。ということでボラ貯には花丸を出したのですが、問題は突貫工事なんですよね。今回はパイが半分になってしまったので、みるみるうちにＮＧＯが大変な状況になっています。

津村：突貫工事というのは、例えばどんなことですか。

平山：悪の根源は、やっぱり単年度主義なんですね。お金をどうしても使い切ってしまわないと、次の年は減らされてしまうということなんです。それと、ボラ貯は人に使えると言いましたが、事務局経費は付かないんです。いま要請はしているんですが…。つまり日本で事務局をやっている人にはお金が付かないんですね。そうすると非常な過労で、もともと例えば４０歳位の人でも月給が２０万円もなくて、それで東京で暮らしているわけです。かつ週６日、７日と働いて、皆だいたい夜の１１時頃帰っていくという状態です。どうしてそうなったかというと、日本に事務局があって、南の国に現場があるわけです。現場には、もちろん建物にも人にもお金が付きます。現場にいる人の場合は生活費が安いわけですが。ただし人を一人送ったら、事務局も現場の人に対して一人置かないとなかなかやっていけません。ところが日本側には全然お金は付きません。これは非常に大きな問題です。単年度主義というのは、向こうにニーズがなくても、とにかく年度末までに井戸を掘らないといけないんです。掘りすぎであっても、掘らないといけないんです。大きな問題ですね。それを改善しましょうということで、今ちょうど郵政省の評価委員をさせてもらっているのですが、プロジェクト現場に行って報告書を書いています。提案文を出して毎年少しずつ変わって来ています。ＯＤＡも少しずつ変わっては来ているんです。しかしながら、まだまだＯＤＡの補助金というのはＯＤＡの総予算の２％程度で、その上いろんな条件を付けられています。車しかだめだとか、見えるものしかだめだとか、そういったことはまだまだ問題なのですが、少しずつ前進しているかなという感じです。

タイの保健教育も、先ほどお話ししたカリブのような問題把握のための話し合いをどんどんやります。すこしカリブと違うのは、カリブは国連プロジェク

トでタイの場合はＮＧＯですから、お金が全くないといってもいいくらいなんですね。向こうの人たちも、国連の方がお金を持っているということをよく知っていますから、本当はお金を持っていないＮＧＯには来て欲しくない。それでも私たちシェアというＮＧＯと一緒にやるという、何かモチベーションがあったわけです。一番のモチベーションはいい結果が出たらいいわけですね。先ほどもお話ししましたが、quality of life の向上です。村人が楽しめるようなプロジェクトをたくさん行いました。例えばコンドーム祭りで、大きなコンドームの人形を作って皆それを着てパレードをするとか、タイはすごかったんです。ミーチャイさんという人がタイのＮＧＯにいます。今大臣ですが、彼はコンドームを普及させた人で、彼の名前をとってコンドームにミーチャイと付いているくらいです。コンドームのソングというのを作って、これでかなり性病が減りました。こういう風に祭りを利用する、音楽を利用する、それからロールプレイというのがあります。村に行って、どうして自分たちは貧しいんだろうということを劇にしてもらいます。それを子どもたちが見ているんです。「自分たちはどうして貧しいんだろうな」とお父さんたちが言ったら、子どもが「お父さんが酒ばっかり飲んでいるからだ」と言うわけですよ。そうしたらそのお父さんは恥ずかしくなって、それ以後お酒をやめてしまったということもありました。貧困が緩和されてくれば健康につながります。健康の問題を扱ってはいるのですが、必ずしも医療が必要というわけではないということです。それで何が出てくるかと言うと、この問題分析図＜資料３＞、今授業でもやらせていただいていますが、これはタイの例です。実際にワークショップで行った例です。真ん中を見ていただきますと、“農村女性の健康状態が悪い”とあります。私は今まで４０ヶ国に行きましたが、男性と女性を比べるとやっぱり女性の方が健康状態が悪いんですね。イスラムの国に行ったらはっきりわかりますよね。例えば女の子と男の子の双子がいたら、男の子にご飯をたくさん食べさせていたりして体の大きさが全然違います。でもタイのようなイスラムでない国でも、かなり違います。ちょうどお母さんになる頃にヨード不足で甲状腺腫になったりします。また“農村女性の健康状態が悪い”の項目の一つ下の段に直接原因が挙げてあるのですが、どう悪いかというと、栄養状態がまず悪い、男性より食べているものが少ないということがあります。男性の部屋、女性の部屋というのがあって、女性の部屋で料理をして男性の部屋に運ぶようになっていたりするんです。それで“栄養状態が悪い”。次に“医療が限られている”。医療サービスがなかなか受けられないという問題があって、その次に“寄生虫による病気が多い”。それから“妊娠回数が多い”。でもう一つ“過労である”というのがよく出てきます。水汲みなども、過労です。私が見てきた４０ヶ国、どこでも女性の方が男性より労働時間が長いです。農作業はするし、子どもを育てるし、料理はするし、お米をついているのは女性だし、水汲みも遠くまで行っているのは皆女性。アフリカでもアジアでも私の行った国では男性は遊ん

でいるんですよね。つい最近の話なんですけれども、タイの山の中に行って「今旦那は何しているか」と聞くと「魚釣りに行っている」って言うんです。私は“ああ夕食の魚を釣ってくるんだ”と思ってよくよく聞いてみると、それは実は遊びに行っているんです。これは共通しているんでしょうか。世界でも女性の方がそれこそ5〜6倍働いているんですね。そして妊娠回数が非常に多いということで、貧血が非常に多いです。もう一度分析図の左を見ていくと、“栄養状態が悪い”“調理・保存方法が悪い”“食物が不足している”、その下に“食べてはいけないものがある”というのがありますね。その下には“迷信とタブーに影響されている”とあります。例えば、女性は「妊娠中は四足の動物を食べてはいけない」という風習があるわけです。日本にも昔、女性は男性より先に食べてはいけないとか、お風呂に先に入ってはいけないとかありましたよね。栄養状態が悪いという問題を初めに見たらなかなか私たちにはアプローチできないように思うのですが、分析図の下の方で原因をたぐると、手伝えるようなことがあったりするんですよね。例えば栄養のところで、農業作物が少ないとか調理方法が悪いとか。この5年くらいで健康を害しているのは味の素だとわかったのですが、もうバンバカ振り掛けているんですよね。山岳民族、マイノリティのところに行っても味の素、味の素ということで、ベトナムもそうです。今回のベトナムで、ご飯をずっと屋台で食べていたのですが、まず味の素と砂糖は入れるなということをずっと言っていました。砂糖のカルシウム破壊はものすごいんです。企業がどんどん途上国に入っているのが見えますよね。先進国は今、いいものを食べようとか悪いものを除外していこうとしているのですが、その分だけ悪いものが途上国に流れていくという形です。それからまたびっくりするのは、山の中でも抗生物質がものすごくたくさんあるんですよ。今日本が薬漬けで一番と言われていますが、貧しくなればなるほど悪質の薬漬けです。まず医者がいないために薬を買い、それで借金をしています。どうせ病院には行けないということで。彼らは2種類の薬で借金をします。一つは人間のための薬、もう一つは農薬です。１９９４年ルワンダ難民キャンプに行った時にコレラがどっと流行っていたのですが、抗生物質が全然効かなかったんです。普段から抗生物質の取りすぎ使い過ぎで、重要な時に全然効かないわけです。これは大変な話だと思っています。今回ベトナムやタイに行って、伝統治療士とずっと歩いたのですが、エイズに効くような薬、ガンに効くような薬を彼らは知識として持っているんです。ですから本当は彼らの知恵を活かせるところに、大きな近代化、「近代化の波」がどんな田舎にも入っています。これは日本も同じだと思いますが。ですから、これからもう一回きちんと自分たちの知恵を再建する、今回はそのプロジェクトです。知恵を再建するプロジェクトということで、薬草を見直すのがこのタイ、ベトナムの旅でした。薬草というのは、ものすごい数があるんです。１４０種類位くらいあって、「これはマラリアに効く」とか言って持ってくるんです。これは非常によかったです。

私はカンボジアに行くたびに病気になるのですが、ホームステイをしていた時に戻したり下痢をしたら、そこのお母さんがコインでガーッと背中を引っかいてくれたんですね。すごく痛いんですけど、すぐに治ってしまいました。もう今ではカンボジアではコインを使っていないのですが、それでゴシゴシ３０分くらいこすってくれて、つまりマッサージです。それで免疫力が高くなって、元の健康体に戻るというわけです。今回いろいろな方法で調べたのですが、ベトナムにもタイにも伝統医療が残っていました。彼らは本当に自分たちで治せる、というか治療できる技術を持っているのですが、どうしても近代化思考が入ってきてしまって、伝統的智恵が隅に追いやられているという状況があります。でもまだベトナムは救われるなと思ったのは、伝統治療士の勉強もしないと医師の免許が取れない仕組みになっていることですね。

津村：そのデータはいつ誰がどのように分析したものですか？

平山：一番初めに分析したのは'９１年です。タイのアカ族という村があります。これをもとに教材を作りました。この系図は非常に簡単にしてあります。これはカードで作ったのですが、もっとドーッと出てきます。

伊藤：たくさんある中から整理してこれが出てきたわけですか。

平山：ええ、そうです。この系図ですが、下の方にいくと“情報が不足している”と出てきます。どうして情報が不足しているかというと、情報をもらう機会がない、学校がないとかいろんなことが出てきます。どうして学校がないかというと貧困だからで、これは循環して上に上がっていくんです。どこかでその悪循環を断ち切る。私たちが切れそうなところをこれで探すんですね。上の方を見ていてもできなかったら、例えば“寄生虫による病気が多い”という項目の下、原因の一つに“排泄物が適切に処理されていない”とあります。その下には“トイレを使う習慣がない”と。じゃあトイレプロジェクトをやろうと、できるところからやっていくんですね、医療がなくても。そうするとトイレを使う習慣が少し出てきて、“排泄物が適切に処理されていない”というところが“されている”になり、“寄生虫による病気”が少しは減るわけです。そうすることによって、“農村女性の健康状態”も少しはよくなるというわけです。ですから下の方を見ていて、自分ができるところからやるということです。そういうことで、この“問題分析”を授業でもやってもらったんです。

今お話しを聞いていただいてもお分かりになると思うのですが、結構楽しんでやっています。「大変なところに行くなあ」と言われますが、結構おもしろくやっています。まだまだこういったワークショップをやる人たちが少なくて、自分がどんどん海外に出るのもいいのですが、やはりもっと層を広くして、たくさんの人に行ってもらいたいです。先進国が１０本の指くらいしかなく困っている国が、ロシアの分裂によってもっと多くなり、１６０以上もあります。とても少数の人間では間に合いません。クラスの中から何人か、将来的に出てきていただければ嬉しいです。誰でもできるということが、何か自分ができる

ことが、あるはずなんですよね。人間関係科で勉強したことが役に立つ、グループダイナミックスとか自己分析とか、自分を分析しないと相手を見られないような気が、この頃はします。異文化体験をしてみるということですね。

言葉の勉強

山口：たいていのそれらの活動は英語でやっていくんですか。

平山：私はなるべくそこに行く前に１週間くらい現地の言葉を叩き込んで、少しはわかるようにして行きます。でも発音とかはむちゃくちゃで、向こうに行ってしつこく聞きます。キーワードはだいたい覚えてしまいますね。それでも通訳を付けてやっていますけれど。全然分からなかったら問題ですが、少しでも分かれば、コミュニケーションがずっとよくなります。通訳もやっぱり適当でいいかげんな人がたくさんいますから。ザイールでの私の大失敗をお話ししますと、女の子にインタビューをしていたのですが、通訳がその子の親を殺していたという経緯があって彼女はずっと黙っていた。でも私は緊急だったので、ケニャルワンダ語を全然分からないままフランス語で仕事を通してしまったんです。あれはまずかったなと思っています。少しでもケニャルワンダ語をやっていれば、その女の子の気持ちが分かったと思うんです。毎日同じ質問をしていて、その親を殺した人を通訳に使っていたのですから、どれだけの圧迫感があったかと…。それは本当に申し訳ないことだったと思います。英語などと違って、向こうの言葉は単純で語数が少ないです。例えばインドネシア語でも、単純に「ジャランジャラン」で「歩く」とか、ちょっと勉強すれば少しは勘が付いてきますし、言葉を学んでいるうちにいろんな文化的背景が見えてきますから、おもしろいことはおもしろいですね。

グラバア：キーワードとおっしゃいましたけれども、やっていくうちにこういう言葉を現地語で知っているといいというのが、ご自分の中ではおありになるんでしょうね。

平山：そうですね。一番よく使うのは、これは川喜多二郎さんの受け売りですが、「何か気になることはありますか」です。それは日本の農村を調査するときも使っています。曖昧な質問ですが、でもだいたい１０人くらいに聞くと“その地域の問題はこの辺にあるな”というのがわかります。初めは通訳者に入ってもらいますが、「親が死んだ」という言葉がずっと圧迫になっている子どもがいたり、こういうところでしたら水が汚いということをずっと問題にしています。下痢が多いと「下痢」だけ覚えていたりします。今回は伝統治療士と一緒に呼吸法をやりましたが「吐く」という言葉を、もう１００回くらい言っていたので覚えてしまいました。息を吐くことができない人たちがいっぱいいます。

伊藤：息を吐くことができないんですか。

平山：そうですね。圧迫があって、住民移転の場合もそうなのですが、吐く量が非常に少なくなっています。それは医学的にも分かっていて、今回タイとベ

トナムで「吐く」ということを毎朝皆で、体操をやりながら行いました。「よく深呼吸をするといい」というのはあったのですが、吐く量が少ないんですね。講習では「吐いて、吐いて、吐いて、吸って」、「吐いて、吐いて、吐いて、吸って」というのをやるとだいぶ違ってきます。

グラバア：精神もだけれども、からだが緊張すると、もう吐けないんですよね。

平山：そうですね。あれだけでも、患者さんたちのからだの治りがだいぶ違うみたいですよ。それは伝統治療士たちもよく知っています。例えばタイでしたら「吐く」が「ハイジャイ・オ」で、「ハイジャイ・カウ」が「吸う」という意味で、講習しながらタイ語で「オ、オ、オ、カウ」(吐く、吐く、吐く、吸う)、「オ、オ、オ、カウ」と言うので、もう１００回も聞いていると、ああこれは吸うだなとか、だいたい覚えてしまいます。いろんな言葉がおもしろくて、のめりこんで、おもしろすぎてやめられません。

津村：最初質問された意図は、英語をやっておくといいかということだったと思うのですが、その点についてどう思いますか。

平山：英語は本当なら必要ないように思いますが、一つ英語が必要な事情があります。というのは、いろんな国の援助機関が来ますよね。そのコーディネーションをするためには、タイに入っても英語が必要です。例えば、予防接種は二回打ってはいけないのに、ダブってしまうわけです。コーディネーションミーティングを調整しておかないと、大きな失敗をしてしまうのですね。ドイツも水を考えている、日本も水を考えている、互いに予防接種を考えて、そうすると予防接種を二回も打ってしまい余計に悪くなるわけです。今は英語はきちんとやっておいた方がいいですね。今回も、例えば日本語からベトナム語への通訳を見つけるのはすごく大変なんです。でも英語からベトナム語への通訳なら、まず値段が安いです。英語をやっていればフランス語を学ぶのにも役立ちます。私は第二外国語はドイツ語だったのですが、ザイールに行く時にかなりフランス語を詰め込んで行ったら、なんとか一人で調査ができました。通訳を一人雇わなくてよいということは大きなお金の節約ですから、お金のないＮＧＯで行ったので助かりました。これは大きなことだと思います。少なくともフランス語までは自分でできました。ブロークンなフランス語でしたけれどもそれでもまあなんとかなりました。家庭訪問調査といいますか、家庭といってもテントですけれども、「どうですか」と一軒一軒入って行ってどういう生活をしているか見ているだけなんですね。ですから質問は１０個くらいしかないので、これはすぐ覚えてしまいます。「マットを敷いていますか」、それは目で見てもわかりますが、「今日は何を食べましたか」、そうしたら「大豆とコーリャン」、とかそういうことだけを覚えたらいいんです。雑穀の名前を覚えておけばいいわけですから、だいたい４つくらいしかないですね。それも１００人もやればまた覚えます。でもそれはやっぱり付け焼き刃で、帰ってきたらまた忘れてしまいました。それでも、なんとなく勘ができてきたという感じです。

レジメ＜資料１＞の「カンボジア・タイ」の最後に“学校との連携・コンクール”とありますが、これも保健のプロジェクトで、子どもたちの保健教育として絵のコンクールをしたものです。「どうして病気になるかを絵で描いてみて下さい」と。優勝した子どもの絵は、色使いはそれ程きれいではなかったのですが気づきがすごかったです。川の絵を描いて、ここで排尿している、ここで洗濯をしている、ここで果物を洗っているという風によく気づいていたんですね。その子には自転車をあげました。「どうして病気になるか」、子どもたちが一生懸命考えて気づきが出てきた。やっぱりこれは気づきなんですよね。そのコンクールは大当たりでした。しかもそのタイの村にはごみ箱がなかったのですが、ごみ箱がないからこんなに病気が蔓延するんじゃないかといって、至る所にごみ箱ができました。自分たちのイニシアティブでできたのです。そうしたら隣の村の人たちも見に来て、「うちもごみ箱を作ろう」、「うちでもコンクールをやってくれ」ということになりました。こちらが用意したのは賞品だけといいますか、なるべくこちらが勝手にやらない、ということを意識しました。

山口：そういう最初の村というのは、どうやって決めて、どうやってコンタクトをとったりするんですか。

平山：ＮＧＯの場合は、全くの出会いです。村を歩いていて、たまたま英語のできる人がいたとか、そういったことです。現在かなり多くなっているのは、国連などが全然入っていない所に行ってしまうということですね。どうしても、入りやすい所には先に国連が入っていますし、欧米のＮＧＯはかなりよく頭が回って、難しいところには行きません。日本はいろいろ批判はありますが、大変な所に多く入っています。まあ下手といえば下手なんですね。ザイールのルワンダ難民キャンプの時も、国境なき医師団ＭＳＦという世界的に有名なＮＧＯがあるのですが、ああいったグループは、いいところをパッパッパッと取ってしまいます。なかなか車でも行けない、歩いて三日もかかるという様な所に、日本が一番最後に駆けつけて、いつも大変なんです。１週間に１度コーディネーションミーティングに行く必要があるのですが、また歩いて行かないといけないといったような状況です。

山口：そうするとそういったところにワーカーというか、出かけて行って、そこで何か生活を始めて、コミュニケーションしているうちに興味のある人が寄ってきて、話をしてみるというところから始まるんですか。

平山：信頼関係作りがまず最初ですね。今回行ったタイの村も私の友人が最初に入った時、彼には薬草をチェックできる技術があるのですが、向こうは“日本の企業が入って来た”とかなり警戒して、スパイを二人付けたそうです。というのは、以前日本の企業が入って来て薬草の技術を盗んだうえに、それに特許を付けてしまったということがあったのですね。ですから変な話ですが、日本の会社が特許を取ったためにタイの人が使う時にはお金を払わないといけないわけです。これはプロパティライトというので、今問題になっていますが、

至るところで起こっています。中南米でも同様です。これはもう倫理の問題だと思っています。ということで、私の友人が行ったときも疑われたわけです。しばらく経ってみて“こいつは悪いやつじゃない”と皆が心を開いてくれたと、今では笑い話になっています。この様に、ほとんど日本のＮＧＯは誰かが飛び込んだとか、歩いてたまたまそこにたどり着いたとか、そういった出会いが多いですね。プロジェクト立案、計画論というのを東京の方で教えていますが、「フィージビリスタディをやって、ニーズの一番高い所でプロジェクトを」とテキストには書いてありますが、ＮＧＯはそういう風にはいかないですね。国連やＯＤＡとは違って、出会いからスタートするという形です。

ルワンダ

平山：ルワンダ難民キャンプでの援助の悩みというのは、カンボジアと全く一緒です。もっと複雑だったのは、普通は内戦で兵士が兵士を殺しますが、１０歳の子どもまでが今まで遊んでいた近所の他部族の子どもを殺していたということで、非常に大きな悩みでした。私たちが援助している中には、その殺した側の人間も含まれているということで非常に悩みました。ここで援助していたら結局人は救えるかも知れないけれど、殺しを援助しているようなものだと。

今アフリカは非常にややこしくて、どこを援助したらいいのかという判断が非常に難しいです。援助物資を渡せば渡すほどそれは軍人の方に流れてしまいます。ルワンダの悪玉はザイールの難民キャンプに出てきていて、そこで援助物資をまとめて持って行ってしまいます。今回また、難民キャンプ存続の長期化というカンボジアの二の舞を踏んでしまいました。難しいところです。

イラク

平山：去年ハーバードで研究員をさせていただいた時に、経済制裁下のイラクを研究テーマの一つにしました。今までの話はすごくミクロの話で、村の中でどうしようかという取り組みなのですが、村の中でどうがんばっていてもうまくいかないということがあります。それは政策の問題で、イラクのように経済制裁下にあるというと、政府の意図、決定によって国民の健康状態が非常に違ってくるんです。イラクというのは高度医療国で、中東の人たちが皆留学してくる程です。ＣＴスキャンなど日本が持っているような高度医療を持っています。ところが、１９９０年に湾岸戦争が起こり、その後経済制裁にあったわけですよね。湾岸戦争の前のイラクは、例えば栄養の問題は肥満にありました。それが栄養失調に逆転したのです。国連がアメリカに引っ張られて経済制裁を行いました。ですが、国連に対してこれではいけないのではないかということを、科学的に分析して政策変更、この場合は国連の政策変更を提案するのが私の仕事でした。１ヶ国が経済制裁をする時もありますからその場合はその国に提案します。アメリカによる制裁が一番多いですね。これが政策提言による国際協力です。こういう調査も新しい型の国際協力です。私が担当したのは保健チームで、他にロンドン大学から経済担当の人が来て、私は特に栄養と死亡率の調

査をしました。家を一戸一戸回って子どもの体重と身長を測っていくという方法です。子どもは何人亡くなったか、'９０年から去年'９６年までに何人亡くなったかということを質問していって、その時は２，０００軒くらい訪問しました。今までそんなに大変だと思ったことはなかったのですが、短期間に集中的にやらなければならないのは、やはり疲れました。その時はアラビア語を覚える暇がなかったので、ヨルダン人８人、イラク人８人に来てもらい、その人たちをまずトレーニングしました。しかし彼らが教育を受けている人かというとそうでもなくて、目盛りの読み方を間違えることもありました。例えば体重計に子どもを乗せるんですが、その時に座布団を置いて子どもを載せるんですね。座布団の分だけ重さを引かないので数字がおかしいわけです。そういったトレーニングをしてスーパービジョンを行って、時々チェックを入れるというような形の仕事でした。その結果、「これだけ栄養失調の子どもが出ているのだから、経済制裁は止めた方がいいんじゃないですか」という提案だったんです。アメリカの今の国務長官のオルブライトさん、あの人は当時アメリカからの国連向け大使だったのですが、彼女は自分は humane person だとか言って、“アメリカの兵士がこれ以上死んではいけない” と引かなかったんですよね。

援助の形を大きく分類すると三つくらいありまして、一番単純な形は物をあげてしまうことです。例えば鉛筆でもそうですし、奨学金でもお金でもそうなんですが、何かの供与というのがありますよね。これが一番簡単な形です。二番目は今お話ししたような advocacy 政策提言です。科学的調査に基づいて、たとえ気持ちがどうであってもきちんと科学的データを出す。今回は疫学調査をやったのですが、私はこれはなかなかいいと、これからは大事なことだと思ったんです。ところが国連に提出したものの、アメリカのオルブライトさんに阻まれてなかなかうまくいきませんでした。ここで思ったのは、データをどれだけきちんと提示しても、ある程度の影響力はあるけれど、やっぱり政治で動かされてしまうということでした。三つ目は、やっぱりこれだと思ったのですが、まだ日本語になっていませんが、capacity building というのでしょうか。現地の人たちの capacity building というのはやはり大事だと思うんです。経済制裁が起こっても、薬を自国で調達できればこんなことにはなりませんよね。結局、薬が入ってくるのを止められているわけなんです。食物が入ってくるのも止められている。つまり、イラクは自給率が低いんです。考えたら日本も同じです。日本も'９３年は大豆がひどかった、自給率２％でしたよね。もし日本が経済制裁を受けるとどうなることかと思います。今の日本は薬漬けですよね。神戸の震災の時も痛感ました。慢性病の人は全部薬で対応しているわけです。そこで薬がきれて大変な状態になった。もう少し薬漬けの状態を回避しないといけません。イラクを見ても、病院に大きな機械が並んでいるのですが、例えばＸ線にしてもレントゲン液が入ってこない、手術をするにしても麻酔薬

が入ってこないという状況です。ですから何もできません。それまで機械使いの医者ばかりだったわけです。日本もかなり近いところにあります。

ところで、１９６１年から現在も経済制裁下の国をご存知ですか。アメリカが制裁している国です。イラクとは全然政治体制は違うのですが、カリブ海のキューバです。キューバの場合はファミリードクターという制度があって、全然高度な技術は持っていませんが各村にいます。また、自分の村でちゃんと野菜も作ります。イラクの場合は医者がバグダットに集中して、高度な医療は全部そこにありました。それから、キューバでは農業教育を本当にきちんとやっているんですね。農業は一番大事だという考え方です。片やイラクというのは工業化しようとしていて、全部 western といいますか、近代化しようという考え方です。これは大きな違いだと思いました。また、イラクの場合は犯罪率も非常に高くなっています。物がなくなってしまい、例えばお金持ちであっても、お金はあっても物がないからどうしようもないわけです。お金がものすごくある人は、何とかがんばって国外に出て物資を調達しますが、ちょっとくらいの小金持ちではどうにもならないという状況でした。ですからやっぱり自分の国の中できちんとやらないと、これから大変なことになるという気がしています。これは日本にもいえるのかなという気もしています。

少しずれてしまいますが、イラクの調査をハーバード大学での研究の一つとお話ししましたが、もう一つ私が調べたことがあります。イラクの話とうまくつながると思うのですが、food mile これはアメリカで言い出されたので mile なんですが、food kilometer といってもよいです。普通魚などを買う時には、やっぱり新鮮な方がいいですよね。ですから何日経っている魚だとか、捕ってから２時間経っている魚だとか、これを英語で 2 hour old 、1 day old fish という風に言って選びます。それを時間ではなくて、どれだけ遠いところから来ているかを、2 mile fish という風に言います。遠ければ遠いところから来ているものほど、例えば防腐剤がたくさん入っているわけですね。そして、遠い所から物を搾取して持ってきているということ。アフリカの飢餓は過剰輸出なんです。ですからこれは、やはり自分のところで育つものを食べた方がいいのかなと思います。自分たちの為にもそうじゃないでしょうか。自分の所でちゃんと農業生産をしていれば、イラクのような緊急事態に対しても対処できますから。それから農薬の問題なんかもありますよね。両方の為にもいいのかも知れません。

次には倫理の問題で、私の中では大きな問題だと思っています。ルワンダの難民虐殺がなぜ起きたかというと、一つの要因は食料飢餓、飢餓輸出なんですね。もちろん歴史的にツチ族とフツ族の抗争ですとか、ベルギーが治めた時に支配による上下関係を作ったということもありますけど、やはり食べ物がなくなって争いになっていますね。ルワンダの場合は、メイズ（とうもろこし）とソルガム（コーリャン）とソイビーン（大豆）が主食です。ルワンダの人々の

主食が、海外で牛の餌になっているわけです。牛肉1kgに対して餌は7kg必要です。アメリカは牛肉を日本に輸出しますよね。日本が牛肉を買えば買うほどアメリカは餌が必要で、またアフリカから餌を輸入するということです。ですから途上国の食料不足に日本は関係ないとは言えないんですよね。自分があるところできちんとしなければならないし、日本の農業をもう一度考えないと、これは大変なことになるのではないかと思っています。他の国の人たちの命までもどうなるか、こういった緊急状況になった時に大変だろうと思います。防腐剤はたくさん遠いところから運んできます。そういった問題があることに気付きました。

山口：そういう国家単位で物を考えるのというのは、私たちが今地球という一つの星の上に生きていることに目覚めて地球単位で物を考えようとしている動きに逆行するということにならないですか？お互いの不信頼関係の上に立っていつも準備していなければいけないというのは、逆行することにはならないですか。

平山：逆行するというのは。

山口：例えば経済制裁を恐れて自国の中ですべてを賄うようにするというのは、不信頼の関係の中に成り立っていますね。

平山：あ、そうですね。

山口：お互いに他を不信頼の目で見ながら生活をすることが、私たち人間の目標なのか、とそういうことを考えると、私たちは相互依存の関係をどう建設的にというか、健康に築いていくことができるのかという発想に対して逆行するような感じを私は受けて、その自給とか自国だけでということを聞くと、非常に心が痛いんですよね。確かに目先のことでは、安全でなければいけないし、きっと危険なこともあるだろうから、自分で賄える範囲で生活した方がいいのかなとも思うけど、それ自体はこれから私たち人類が地球、あるいは宇宙で生きていくときに本当に必要なことなのかというか、もっと協力しなければいけないし、もっとわかりあい、シェアしていくようにならなければいけないと思うのです。ただ今はアンバランスが起こっていて、牛の為にアフリカの食糧まで私たちが食べちゃっているということに気づかなければいけないということですね。

グラバア：それはそれ自体、国という考え方にとらわれているんじゃないかな。自立ということも国という単位で考えないで、一人一人という単位で考えていく必要があると思います。

山口：皆が自給自足の生活をするということ？

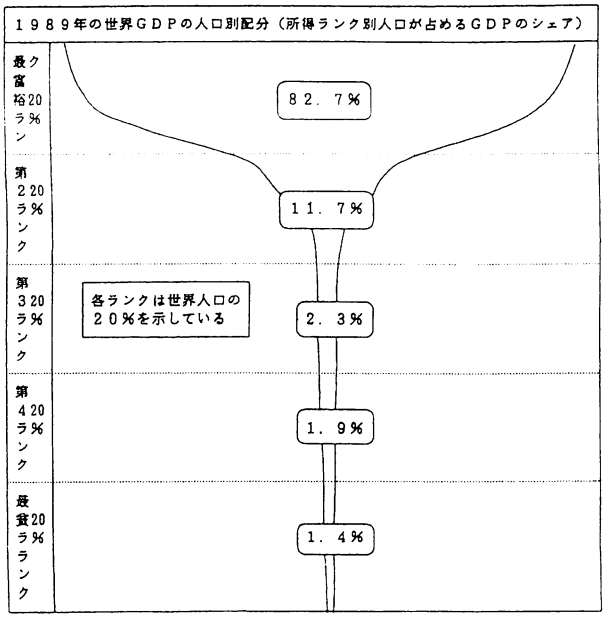
グラバア：それを心がけたらいいと思います。自給自足の生活というのは、全部自給自足するのではなくて、他に頼る規模を小さくしていくことだと思うんですよ。私の感覚では不信頼ということとはつながらない。例えば現実に今農村にいると、日本の農業が不安です。おじいちゃんおばあちゃんも腰が痛くなっ

たから今年の田んぼは耕せないと言っている。そして政府は減反減反と言っているわけで、そういう姿を見ているともう自分の国が、というよりは、例えばここに田んぼがあって生産力があるのに、それが政策の中で皆が育てたいと思っているのに育てられないという現実。国と国との不信頼というよりも、今あるものを活かしていく、本当の意味で、それができていないという感じがするんですよね。

平山：もちろん飢餓が起こって、ある方が提供するというのはいいと思うんですよ。でも完全に逆行しているというか、富んでいる方へずっとものが流れている。

山口：一方通行に流れていくからね。

図　少数の富裕地域への世界の富の集中と多数の貧困地域の存在――世界の両極分化
「シャンペングラス現象」
1989年の世界のＧＤＰの人口別配分（所得ランク別人口が占めるＧＤＰのシェア）



（原資料）UNDP　（出所）*The Economist*, April 25 1992

平山：一方通行はもう本当にひどいです。よくシャンペングラス現象といっていますが、人類を五分の一ずつ分けていきますと、全体の富の８２．７%が人類の五分の一によって占められ、あとの五分の四、つまり人類の８０%は残りの富で細々と生きている状態にあります。これはＧＤＰレベルで８２．７%ですけれども、ＧＮＰでもほぼ同じで８２．７%です。この差はやっぱり大きいと思います。それから統計を見る時に気を付けなければならないと思うのですが、例えば食糧や農作物などを第一次産品を北の国が輸入しないと南の人が困るのではないかという議論がありますが、この買い叩きはすごいんですね。普通統計というのは金額で出てきてしまいます。買い叩かれているから、実際量で考えると南から北に大量に流れていても、援助の金額と比べるとほんの少し

にしかならないんですね。実際どんどん輸出しないといけないので、今の状態ではやっぱり飢餓輸出になります。

山口：日本だってたくさん作って、古米、古々米になって捨ててしまっている。そういったことだって、日本だって出すものはいっぱいあるんだと思うんだけども、捨ててしまっている。こういう状態が起こっているというのは国のエゴの問題なんだけれども。

グラバア：国のエゴの問題か、経済か。さっきのタイで日本の企業が入って薬草の技術を盗んでいくという現状、ブラジルでも同じようなことがあったと聞きました。それは国ということよりも経済優先の価値観だと思います。それはもう個人が引き受けるしかどうにもならないんじゃないかな。それをやっているのは国ではないし、それを支えているのは私たちだと言わざるをえない。

平山：この貿易の物の流れが出てきたところをもっとたどってみると、自由貿易というのがありますが、自由主義ということが出てきます。おそらく比較優位という概念で正当化されました。昔よく例に挙げられたのですが、イギリスは繊維を作る、ポルトガルはワインを作る。イギリスは比較優位、イギリスは繊維を作るのが得意、ポルトガルはワイン、昔は繊維とワインを少しずつ作っていたのが、やはり優位の方に固めましょうと。だからイギリスは繊維を、ポルトガルはワインをつくりますよと。相互依存でうまくいっているように見えますが、実際この貿易の歴史をずっと研究した時に、イギリスの方の政治力が非常に強くて、繊維をつくる方が確かに比較優位なんです。ポルトガルの方がワイン作りは得意なんですが。かなりポルトガルの国力が落ちて行っているんですね。やはり経済力を上げるという方に傾きすぎているのかなという気もします。貿易摩擦などを見ていても、アメリカを見ると、アメリカっていうのは農業作物にかなり補助金を出しているわけですね。日本でも作物ができるのに、例えばコーンでもそうだと思うのですが、これを捨てなければならないというのは、アメリカの政策で補助金を大量にかけているということがあります。かつ今まではＧＡＴＴウルグアイラウンドと言いましたが、普通新聞などでは車のこととかコンピューターのチップのことを中心に取り上げていますが、本当は農作物が大変な状態に陥っていて、これを買わないのは日本が市場を閉鎖している、つまり自由貿易をやってないのではないか、やはりフリートレードはいいんだと、こう迫ってきているんですね。国で迫ってきているといいますか、非常にひずみがあります。

山口：ひょっとするとそういう近代経済学を超える、例えば地球全体と宇宙レベルの新しい経済学が作られないと、私たちはそのジレンマから抜けられないのかもわからないですけどね。物の計り方がどうも違うということがわかってきたっていうかね。

平山：そうですね。だからスカンジナビアの国なんかは、環境保全まで邪魔をされたと言っています。リサイクルに関してですが、この時もＧＡＴＴの判定

でした。確かデンマークだったと思いますが、ある容器をアメリカかイギリスかどこからか輸入していました。でもデンマークでは環境のためにリサイクルをやらなければならなくなりました。こういったものをどんどん捨ててはいけないということで、リサイクルできる物はもう一度再利用しなさいという法律を出したんですよ。これをアメリカかイギリスかどこかの国が自由貿易をダメにしているということで提訴して、ひっくり返されてしまいました。容器はリサイクルせずに捨てなさいということになってしまいました。また、'９５年にＷＴＯ（世界貿易機関）ができました。ＧＡＴＴとＷＴＯの違いというのは、ＧＡＴＴはただの規則、ルールだったのですが、ＷＴＯは一つの国連機関になってしまって、ここに各国が加盟するわけですね。ＧＡＴＴはルールなので、例えばメキシコとアメリカが問題を起こしたらこの二カ国で話し合えばよかった。日本とアメリカの問題なら、日本とアメリカで話し合えばよかった。ところがＷＴＯはメンバー制度なので、多数決になります。全然関係ない国が、例えばアメリカと親しい国はアメリカに票を入れることになります。ですからＷＴＯに南の国は入りたくないと言ったんですが、圧力がかかりまして。私はもう少しＥＣが自然保護にがんばるかと思っていたんですが、最後にヨーロッパの国が折れてしまい、その後アフリカの国がどどっと加盟しました。日本と関係するのが、農薬の基準が下がっているという話です。日本が農薬の基準が世界で一番厳しいんですね。アメリカなんかはポストハーベストといって、作物の収穫後にもバサッとかけるんですが日本は禁止されていました。ところがここでharmonization という言葉が出てきて、全世界で食物中の農薬残留基準を統一しましょうという話になりました。いいことのように見えるのですが、各々の国で食生活が違うわけですよね。日本人だったら米の消費量が高いし、アメリカ人の場合はポテトの消費量が高い。食文化が違うのに一定化したら大変なことです。これこそ異文化で違う食習慣があるから一個一個丁寧に見ていかないといけないのに、統一しましょうと言うわけです。この harmonization で農薬の規則が厳しくなったのならいいのですが、基準がガタガタに下がってしまったんです。その理由は何だろうと文書でずっとひもといてみたら、「発展途上国の経済発展の為に」とある。発展途上国も薬品を作り始めました。それは人間に対する薬、また農業の薬でもあるのですが、発展途上国の輸出振興の為に基準を下げてあげましょうと。これは誰が書いているのかと見て私はびっくりしましたが、健康を扱うＷＨＯと農業を扱うＦＡＯが、ジョイントでコーディックスコミッティというのを作ったんですね。ここが言い出したことなので、ちょっと私はびっくりしました。日本の厚生省はどうするんだろうと思っていましたら、毎年日本の人々の健康ということで報告書が年次報告みたいに出されるのですが、そこでも驚いたことにこの３年位前から農薬の危ないものがリストに載らなくなってしまったんです。かなりアメリカの薬品会社から影響力があって折れてしまったということです。私たちの健康にも関わってくる

ことで、ちょっと怖いなと思って調べています。

もう一つ、論理のすり替えがあるんですね。例えばある農薬がガンを起こすような疑いがあるとします、けれど食べている物の中のどれでガンになっているのか分からないわけです。科学的にそれが証明されなければ禁止できないと言われています。でも私はこれは逆だと思っているんですね。科学的に安全が保証されなければ使わせないというのならばわかるけれど、逆じゃないかなと。それを聞いて今回ボストンで調べてみました。

山口：因果が証明されたときは死滅している。

平山：でも私は日本はまだいいと思うんです。なんだかんだ言っていても長生きしてますから。心配したのはダンピングが行われないか、途上国の経済発展を支える為と言っていますが、結局基準が下がってそれを受け入れるのは、基準が全然ない途上国だと思うんですね。だからダンピングが起こらないかな、もっと悪くなるんじゃないかなと心配しています。ですからこの harmonization は、非常に危険だなと私は思います。自分で国際協力をして村に入っても、それだけ薬がどんどん入っているわけですよね。農薬もいろんな国で禁止していますが、それは国でバラバラで、最低基準も非常に低いので、大きな問題じゃないかなと思っているところです。いろいろ国際協力で村に入っていると、ちょっと見えるものから、大きな国の政治の動きまでが見えたり、マクロとミクロを行ったり来たり、いろんな動きが分かってきます。その中で自分が日本にいて、どうしてこれだけアトピー性の子が多いんだろうとか、そういう問題もやっぱり関係しているんですね。今遺伝子組み替えの食品が入ってきたりもしていますよね。アフリカというすごく遠い国の話をしているようですが、全部自分と関わってきているという気がしています。それで capacity building はやっぱり大事だと、自分で何をやっているか分かるということですね。

■プライマリ・ヘルス・ケア

平山：次にレジメの３ですが、“「われわれ」が地域でつくる世界の健康”のところに、地域作りの中で非常に大切なＰＨＣという言葉があります。プライマリ・ヘルス・ケアのことです。昔は、説明しましたように、医療がなくてもプライマリ・ヘルス・ケアがあれば良かった。これはアルマ・アタというところで宣言がされたのですが、それを読んでみます。「プライマリ・ヘルス・ケアというのは、自助と自決の精神に則り地域社会または国が、開発の程度に応じて負担可能な費用」そこが大事なんです。負担可能な費用。たくさんの、例えばＯＤＡでいろんな高度な技術移転を行っていますけれど、技術つまり機械を使っている場合は、メンテナンスも含めて「負担可能な費用の範囲内で、地域社会の個人または家族の十分な参加によって」このときに参加という言葉が出てくるんですね。「彼らが普遍的に利用できる実用的で科学的に適正で、かつ社会的に受け入れられる手順と技術に基づいた欠くことのできないヘルス・

ケアのことである」。簡単にこれを解説しますと、目標としては「どこでも誰でも健康な生活ができる」ということをこのプライマリ・ヘルス・ケアの宣言は目指していて、原則は「ニーズ指向」、もう少し言うと地域のニーズということなんですね。住民が参加して行なう、だから医者が行っているというのではない。「地域資源の有効的活用」、物を持ち込むのではない。それから「多分野協力」ということで、農業やいろんな分野が一緒に取り組まないとこの健康づくりはできませんよと。それをまとめて「医者や看護婦でなくても国際保健協力はできる」と、私は言っているんですが。具体的にどういう活動をしたらいいですかと、いろんな人によく聞かれますが、ユニセフが提案しているＧＯＢＩ－ＦＦＦをやったらいいと思います。今日はＰＨＣとＧＯＢＩ－ＦＦＦだけを覚えていただければ、役に立つというか、国際協力はこんなものだと説明ができると思うんですね。ＧＯＢＩ－ＦＦＦの「Ｇ」は gross monitoring、子供の発育観察。先ほどイラクで私が体重と身長を測っていたということを言いましたけれども、ともかく測ることは誰でもできるわけですね。それできちんと発育観察をしていけば、何か異常が出たらすぐわかります。途上国で死ぬのは、異常が出た時に分からないで放っておいて手遅れになってしまうということです。ただグラフをずっとつけているだけです。これが非常に大事なんですね。その次の「Ｏ」は、ＯＲＴ（Oral Rehydration Therapy）またはＯＲＳ（Oral Rehydration Salt）のことです。先ほど下痢によって死ぬ子どもたちが非常に多いという話をしましたが、砂糖と塩を混ぜてきれいな水を入れ、それを飲むことによって rehydration 脱水を防ぐ「経口補水塩」を作ることを教えます。ともかく一週間こればっかり村人にやってもらうわけです。そうすると死ぬ人が非常に少なくなるんですね。「Ｂ」は breast feeding で母乳保育です。昔援助でミルクの粉が入ってきていました。西洋から入ってくるのでいいものだと思われたのですが、ネッスルの粉ミルク非買運動が起きたくらい問題でした。結局粉ミルクをあげても混ぜる水が汚いので、一番いいのはやはりお母さんの母乳なんですね。お母さんのおっぱいから出るんで、ハエがたかっても自分が感じるからパッとハエを追ったりしているんですね。ボトルに入れていたらわからないです。水が汚い、じゃあ沸騰したらいいと言うのですが、沸騰させる薪を取りに行く時間がありません。また、教育の程度になりますが、昔アフリカでは、結局「大事な粉」だということで水でがんがん薄めるんですよ。なるべくもたそうとするんです。粉ミルクを作る時の指示が書いてあっても、字が読めないからどのくらい薄めたらよいかが分かりませんし。母乳というのは、ぴったりその子に合うようにできているんです。だけど海外から入ってきた白いきれいな粉がいいという風になってしまったんです。今は母乳をどんどん推進しようという事になっています。「Ｉ」はユニセフが運動している予防接種です。非常に少ないお金で予防接種ができる、immunization。次の「Ｆ」はもっと簡単にできることなんですが、female education です。

日本の健康の歴史を見ていくと分かりますが、ある時点で乳幼児死亡率がドンと下がっているんですね。それを分析していくと、その乳幼児死亡率がドンと下がった２０年前、この時期から日本の女の子たちが皆学校に行くようになっています。つまり皆字が読めるようになって、この女性たちから生まれた子どもの健康状況も大きく違ってきたわけです。母親が読み書きできると子どもの健康状態にまで影響します。ですから female education が大切です。途上国で次に多いのは、出産時に死んでしまう子どもたちです。それはお母さんの栄養が足りないからです。子どもばかりにユニセフも目が行ってしまうのですが、実は妊婦にちゃんと食べさせてあげるということが非常に大事で、これは補助給食「Ｆ」は Food Supplement と言っているんですが、足りない分ここで補ってあげることです。お母さんがしっかり食べていたら、次にはちゃんと母乳が出てうまくいきますよという話なんです。もちろん母乳の出ないお母さんも増えてきていますから、その場合は子どもにもあげるということをやっています。その時は粉ミルクを使っていますが、きちんと母親に指導して行っています。次の「Ｆ」は family planninng でもいいのですが、普通は family spacing と言っています。次々子どもを産むのではなくて、１人目の子どもを産んだら２年位あけましょうよと。それでも数はすごく多い訳で、統計によると４人以上子どものあるお母さんの死亡率は非常に高くなっています。３人と４人のところでえらく違うんです。日本だったら栄養状態がいいのでそんなことにはなりませんが。family planning だと数も関係するのですが、今は spacing ということを推進しています。これがＧＯＢＩ－ＦＦＦで、国際協力とはと言うとこれをどうぞという感じで。

津村：それは平山さん自身が考えたものですか？

平山：違います。ユニセフです。でもできることはありますよね。何も難しいことはないです。immunization は分かっている人に打ってもらわないといけませんが。breast feeding を勧める、「breast feeding の方がいいですよ」と言って、絵を持って私が回るというよりもトレーニングをした人、カンボジア人ならカンボジア人をトレーニングして紙芝居を持って村を回ってもらう。oral rehydration、簡単です。塩と砂糖を入れて水を入れてそれを１週間やる。gross monitoring も簡単。これは誰にでもボランティアができます。２，０００人ずっと測っていきますけど、やはり先ほども言いましたが、体重計の上に座布団を置くとか、変なところから目盛りを読むとか正確な読み方がなかなかできないので、村の人の中から選ばれたヘルスボランティアと呼んでいる人たちを１週間トレーニングします。かなり gross monitoring もできるようになりましたね。female education もなんとかできますよね。family spacing この辺りも、全部教育の問題なんです。情報の問題。

伊藤：経口補水塩というのは、体が弱ってきたときに飲ませるんですか

平山：下痢の時です。下痢で一番多くの子どもたちが死んでいきますから。G

ＯＢＩ－ＦＦＦはなかなかよくできています。ユニセフとＷＨＯを比べると、ＷＨＯは医者が牛耳っていますが、ユニセフは医者ではない人の方が多いです。ユニセフは非常にいい成果を出しているんですね。何も医療はいらない、どうせ大きな機械を持って行っても２年位すると壊れているので、人海戦術でいくと。情報を持って、絵を持って、字が読めなくても。これがプライマリ・ヘルス・ケアの一番重要な戦術になっていたと思います。

山口：それは社会的に受け入れられる手順や技術が必要なのでしょうね。例えばある国では女性が学ぶことは社会的に認められなかったり、いろんな障害にぶつかることもあるでしょうね。

平山：ありますね。特にイスラム教の国は難しいですね。まず family spacing を持ち出せないし、ゆっくりですよね。それでもパキスタンでもバングラデシュでも少しずつ女性を外に出すことができるようになってきました。バングラデシュの場合は自分一人では外出できなかったですね。旦那が付き添ってしか出られませんでした。この頃は少しずつ外へ出られるようになって、女性だけを集めてワークショップをやるとか、女性のトレーナーを育てて回ってもらいます。この頃は女性がオートバイも乗っていますからね。すごいもんだと。でも急に価値観は変わりませんから、例えば「迷信とタブーは、これは悪いものだ、これは止めろ」とはちょっと言えません。それは彼らのアイデンティティにもなっていますから。丁寧にゆっくりと信頼関係を作っていってからになりますが、そのタイミングはやはり難しいですね。人間関係科で勉強したら、そういうタイミングもわかるようになるのではないですか。そんなことはないですかね。

伊藤：お薬を飲んだらみたいにはいかないですね。

平山：これはセンスの問題ですから、目に見えるスキルではないのですが、全然こういうのに向いてない人もいます。自分で次々に何でもやってしまうというか。紙芝居も自分でぱっと描いて、「あっそんな汚い絵はだめだ」ってやってしまう人とかですね。向こうの人たちとどうやっていくか。レジメの４番目の、よきモデレーター、カタリスト、触媒というのはそういうところに入っていくんですね。ワークショップなどをして、カタリスト、触媒ですね、どうやって向こうの人たちに考えて気づいてもらえるかということです。一つは現地に行っていた時に、インドの人に教えてもらって役に立っていることがあります。モデレーションをする時に、頭の中で置き換えるだけなのですが、例えば一つの問題を考えた時に、「貧困」というのは概念なんですね。そうではなくてワークショップをする時、向こうの人と話をする時に、頭の中で概念から人間に変えていって、「貧しい人」という風に置き換える。「貧困」と言うと、ある地域で貧困が起こっていますということで、誰がどういう感じで貧しいのかというイメージができないわけです。ちょっと言葉を変えるだけですけれど。「飢えている人」と書いた時に、すぐに頭にぱっと浮かぶのは、誰が飢えているのか

ということです。全員が飢えているのではなくて、その社会の中でも食べている人はいるわけですよね。誰が飢えていて、その原因は何であるか。「飢え」という概念で捉えるのではなくて、人がどういう状態にいるかというのを考えていたら、なんとなく話しやすくなりました。簡単な頭の置き換えなんですが、例えばワークショップをしながら表を作る時にもなるべく人間に焦点を持っていくと、うまくいくようになりました。ちょっとした転換だったのですが、これはいいアドバイスをもらったなと思っています。

いつも貧困の問題で考えるのは、飢えているという話をしましたけれど、誰がアクセスしているかなんですね。村人に「今何が気になっているのか」と聞くと、答は「水」なんです。汲みに行くのは遠いし、近くにあるのはものすごく汚れているということで。「その水は誰が汲みに行っているのか」「女性」だと。「では使っているのは誰か」、「誰が何に使うのか」、「農作業の野菜に水をやるのに使っているのか、それとも台所の料理を作るのに使っているのか」、「それは誰が決めているのか」そういったことをずっと聞いていくんですね。そうしたら、男性が結構好きなように水をじゃんじゃん使っているわけです。女性が一生懸命時間をかけて汲んで来た水を、男性が使っているということがよくあるわけです。本当は台所に使いたかった、子どもに水を飲ませるのに使いたかった、だけど男に取られているということがあるんですね。ですから「水はそこにあるじゃないの」と、水だけを見ていても問題は分からないのですね。誰が飲んでいるのか、誰が決めているのかということを見ていかないと。これは非常におもしろいなと思っています。

山口：具体的に考えていくときの手がかりですね。

平山：私も気づいたのですが、いろいろ問題をやっていて、もちろん例えば気象状況が悪くて日照りが続いたということもありますが、問題は全て「人」から来ています。いがみあいとかですね。人々がまとまってやれば難しい問題でも解決できるといいますか、「人がどう動くか」で解決できる問題はたくさんあると思います。例えば、その男性が決めているという問題も、ちょっとそれはどうなんだろうと女性に投げかければ、隣の女性たちと集まって考えてみましょうということになる。皆で考えて、男性たちが集まった時に村ミーティングに入って、その時やっと私の役割がくるのですが、そこで「おかしいんじゃないんですか」と私が言い出したら皆言いやすくなるとか。また子どもがそこに加勢してくれるとか。よそ者の役割というのはありますよね。

それは日本でもあることで、秋田県に6年位関わり始めていますが、皆お互いに隣に住む人が何を考えているか分からなかったのです。皆農業を捨てようと思っていたんだけれども、皆農業を続けたかったということが分かったとか。それをよそ者が行っていろいろ言い出した。これはアクションリサーチ、アクションラーニングと言っているんですけれども、それをどう持っていくかということですね。この頃向こうに行っていつもやっていることはワークショップ

でしかなくて、何も持って行かないでカードとか絵だとか、それでもかなりの問題が解決できます。道路を造るとかということはＯＤＡにお任せして、私たちがやるのはそっちの方かなという風に思っています。

伊藤：さっきの意識を変えていくということを言われましたが、人々の話し合いを重ね、皆が実情をみていくということを相当期間繰り返さないと意識は変わっていかないでしょう。

平山：そうですね。でもある時ぱっと気付いてもらえることもあります。ですから、おそらく１００やっても１くらいの成果しかない時もあるんですよね。それでも前に進んでいますので、その気づきが非常にうれしいみたいです。それでまたワークショップをやろうとかいうことになるわけです。秋田の場合は向こうから「いつ来るんだ、いつ来るんだ」ともうがんがん電話がかかってきます。それは南も日本も一緒で、結構楽しいからやっているのかなあという気がします。本当は日本の社会の中で、都市の中でもやったらもっとよくなるのかなあという気がします。

山口：Ｔグループ（注：ラボラトリー・メソッドを用いた人間関係トレーニング）だって、グループの中にある埋もれているデータが出てきて初めてお互いがわかりあうということが起こりますね。

平山：ぜひ今度出させて下さい。なんとなく関係ありそうだなと頭の隅にあるんですが、いろんな手法が分かればおもしろいなと思っています。いろんな手法をお話ししていますが、さき程のマッピングも一つのツールのようなものですね。もう一つは food calendar ですね。実は棒グラフが読めないんですね。カンボジアでも、アフリカのボツワナでも。それで、小さなカードを切って一に対して一枚という風に決めます。日本人だったら棒グラフでピッと出てすぐに分かるのですが、それができないので、いろんな丸で棒グラフを作って、この月にはやっぱり物が少ないなとか、分かるようにこちらが工夫します＜資料４＞。そうすれば彼らも理解できるんですね。一生懸命このカードを貼るわけですよ、大きな紙に。食べ物に限らず、村毎で学び合おうということをやり始めています。村毎にヘルスボランティアという人が立っているわけです。どれだけ村でワークショップをやったかをグラフにしたり、下痢のお母さんがどれだけ減ったを調べたり。この統計は非常に難しいんですが、お母さんの場合は anemia だから貧血が起こった時は、その日に箱の中にマッチ棒を入れてもらいます。それをヘルスボランティアが数えます。多ければ多いほど悪いんですが、それで競争してたり。

山口：そういうのはモニタリングですね。

平山：ひとつのモニタリングです。そういうことを学んでもらって、村人も喜んでやっています。いろんな道具を工夫しますが、こちらが工夫していたら向こうもこういうのはどうかと持ってくるんですね。私たちが外部者として参与観察をするような時は、とっぴなこと、例えばわざと「タバコは健康にいい」

と言ってしまって、それで皆がどういう反応をするかを見たり、また誰が一番初めに口火を切るかを見たり、ロールプレイでもわかりますよね。村長になってもらったらその人が村長をどう見ているか分かる。もう一つはカード法です。カード法はまた別にいろいろあるんですが。いろんなＮＧＯが入っていたり、お役所の人が上から落っこちてきて一年位住んでいたりします。村人がどう見ているか、カードに団体名を書いて、それを「どういう関係だと思うか」置いてもらうんですね。他の人は排除して、この人はどう見ているか、この人はどう見ているかという、誰が意志決定しているかがよく分かります。それで少しアプローチが変わっていきます。それは非常にセンシティブな問題です。

山口：人間関係の微妙な日本だけでなくて、世界中どこでもあるのですね。

平山：そうですね。結構今多いのは人類学的、というか社会学的なアプローチです。それができて、ワークショップのセンスがあれば何かできます。

それから、もしかしたらこちらでもやっていらっしゃるかも知れませんが、よくＰＲＡ（participatory rural appraisal）とかＲＲＡ（rapid rural appraisal）という人類学的手法で、一番始めに入った時に調査をしています。それまでは細かく質問項目を決めて、だから structured ですね。決まった項目でずっと村を回っていたのですが、その統計が出る頃にはもうそれは古くなっているんですね。それで短い時間にきちんと統計を取ろうということで、一応 semi-structure で半分位決めていって普通の会話の中から情報を取ってくる。もう一つの問題は、皆援助づけになっていて何を答えるか用意しているわけですよ。こう歩いてきたら、何がないって言ってやろうなんて皆思っているから、それはだめなんです。普通の会話をした時に、やはり川喜多二郎さんの「今気になっていることは何ですか」と言って、私は自分のことを話すんですね。「自分は今日本に置いてきた母がリューマチで困っている」と。そうすると、相手も“ああそうか自分のパーソナルなことを話したらいいんだ”と思って、いろいろ話をしてくれます。いろんなエッセンスが、例えば村長の話が出たり、自分の嫁の話が出たり何か聞き取れるんですよ。あの質問項目はすごいです。川喜多さんの「気になっていることは何ですか」、これはいいと思ってずっと使っています。

今やっているのは何とか住民参加を促すようなもの、それから「パートナーシップ」とレジメに書きましたが、やはり日本人として行っていて日本側に持って帰るものがないといけない。ですから向こうで学んだことを、この機会もそうですけれども、いろんな人に伝えていくことが大事だと思っています。その中で日本の社会を変えるヒントがあったりするでしょうし。世界的な問題をさき程お話ししましたけれど、やはり食糧の問題は自分たちが変えていかないと、このグローバルな issue は何ともならないのではないかということが、ミクロから見えてくるんです。それを伝えるということが大事かなという気が、今はしています。これくらいでいかがですか。

■誰でもスーパードクターになれる快医学

伊藤：質問をあと２０分位。

山口：プリントに書いてある“誰でもスーパードクターになれる。６０点でよい。「快医学」で逃げる”ってどういう意味なのですか。

平山：「快医学」というのは、先程の話でタイに先に入った男性がそうなのですが、筋肉反射を使って薬草を全部判断できるんです。それは内臓の病気、疾患が分かっていなくてもできるわけです。自分の回り、日本だと日本にある草と、例えばその内臓とかどこか痛いところを、伝達棒というのがあるのですが、それをくっつけると全部判断できるんです。医者じゃなくてもどんどん治せる。薬がいらなくなるという、そういう手法です。「快医学」の良いところは、その手法もですけれども、６０点位でいい、完全に治さなくてもいいというところがあって、ある程度治ればいいという気持ちでやると結構治りやすいというんですね。あとは、大変な時は逃げたらいい。今まで、例えば人がいっぱい死んでいて何とかしないといけないと思っていたのですが、大変な時は自分が逃げないともうどうにもならなくなる、逃げるということを「快医学」で学んだといいますか。逃げないと腫瘍なんかが出てくる時に、全部筋肉が力を入れたときに腫瘍ができてくるんですね。それはどういう病気でも内臓病でも一緒なんです。私自身が臨床に入らせていただいて非常によく分かるようになりました。「快医学」というのは食・息・動・想・環となっています。「食」は食べ物のバランス。人間の歯は、犬歯は４本、臼歯は２０本、門歯は８本です。臼歯というのはもともと穀物を潰すんですね。犬歯っていうのはどちらかというと動物性、食べる物もこのバランスで取った方がいいです。それでちゃんとやっていけるという栄養学のデータがあって、これに従っていけば向こうで食事指導ができます。「息」は息を１：３の割合で吸って、吐く。「動」は、快医学というのは気持ちのいい方へ動かします。この４年くらいやってみて、実はガンの患者さんの臨床ケースを集めていますが、成功しています。それで今、エイズに取り組んでいるところです。これは全部バランスを持っているんで「想」はいいことを考えようと。「環」は環境を整えましょうということです。ですからこれに沿っておおまかに頭に入れておいて、ワークショップをしたり健康教育をやったりしています。そうしたら、ずっとうまくいっているんです、この５年位。

グラバア：どこがルーツなんですか。

平山：ルーツですか。これをやり始めた人は演劇家で瓜生(うりゅう)良介という人です。アングラの劇をしていて、今６０いくつ位で、そこにも少し弟子入りさせていただきました。非常によかったです。哲学の話もそうですけれど、治療の話も、全然治療家でない。逃げるということを教えてもらって、非常によかったです。

山口：自分が逃げるということ。

平山：自分がですけれど、人に言うときも「逃げていい」という風に言います。

逃げるというのはどういうことかというと、転職してもいいとか、引っ越してみるとか、環境にも関係してくるかも知れません。

今回タイに3人で行って、その瓜生良介も行ったんですよ。「逃げたらいい」という話の中で、そうしたらタイの人が離婚してもいいかって。人に迷惑をかけないなら、自分は好きなことをやったらいいんだって言いますけれど、好きなことを自分がやる代わりに人にもやらせてあげるようにしないといけないという話をずっとしています。

大森：こういう医学っていうのは、予防医学の方に入るわけですか。

平山：両方です。治療もできるんです。

大森：でも非常に急性だと•••。

平山：外科的疾患は難しいですね。あと内臓はほとんどやっていますね。慢性もそうですね。エイズに取り組みだしたというのは、今ケースはまだまだ少ないですが、今回エイズの人たちばかりを見ていたので、5年経っているんですよ、タイに入りだしてから。それは治ってるし、日本の場合は子宮筋腫が一番効いています。どんどん筋腫が消えていると。きちんと事例を出していって、日本だとまだ医事法突破が難しいので、今弁護士さんと一緒に動いていますが、医事法でどう認めてもらうか。でも実際治っているんだからどうしようもない。

ほとんどの問題は、人がどう動いたかという問題です。プロジェクトが失敗する原因もだいたい人です。お金の問題とは違うんですね。

■女性研究者の利点

グラバア：女性で大変という感じもあったのですが、逆に女性だからこういうお仕事に就いてこういう利点があるとか、こういうことは女性に向いているとか、ありますか。

平山：家の中に入る時、女性しか入れないということがイラクではありました。難民キャンプのところも私しか入れませんでした。回りはほとんど男性でしたので。

伊藤：女性の勘ですごくいい働きができるなんていうことはどうですか。

平山：勘ですか。

伊藤：勘っていう言い方はちょっとよくないのですけど。

平山：食べ物のこととかよく分かっているから、そういうのはいいのかも知れません。調理法はどうしているのかなと見たり。何が不足しているのかなとか。

グラバア：特に女性に関わる事柄が多いですよね、援助は。母親のこととか育児のこととか、そういう意味では女性が語るのは、基本的な説得力があるかもしれませんね。

山口：健康の問題は女性の健康状態がキーになっているわけだよね。女性に近づいていくのは、男が近づくより女性が近づいていく方が安心というか、相手も受け入れやすいというか。

平山：もちろん男性の意識も変えないといけないので、アプローチしていますけれど。

山口：それは女性が変われば男性も変わりますからね。

グラバア：女性の社会的な地位が低いところに入る場合が多いと思うけれども、活動している女性の姿を見るということ自体が意味があることかもしれませんね。

平山：それはあるかも知れません。ですから、もしかしたらバングラデシュで女性が外に出て行くようになって、オートバイに乗るようになったのかも知れません。そこの社会規範で許されなかったことですから。あそこはサイクロンが多くて、溺れたのは女性なんです。外に出られないから。男性がいなかったら外に出られないんです。

グラバア：そこまで厳しいのですか。

平山：しかも子どもを抱えていて、サリーではないですが、布をたくさん身につけていますから、溺れて死ぬのは圧倒的に女性が多いです。買い物にも行けないですし。料理をするのは女性ですが、買い物は全部男性が決めて買って来ます。ですからほとんど家にいます。こんなことをよくやっているなと思います。

グラバア：女性の果たすべき、さっき山口さんが言っていた新しい世界観というところに、女性の果たせる役割があるのかなあとも思いますが。

平山：あると思いますね。国連難民高等弁務官の緒方貞子さんも頑張っておられて、非常に評判が良いです。ＷＨＯの中嶋さんに比べると。だから女性はやさしくされているのかもしれませんね。明石さんだってかなりいじめられてきましたし。私は同じセクションにいましたのでよく分かりますが、あの実績でカンボジア、その後ヘルツェゴビナというあんな飛ばし方はないですよね。もし女性だったらあんなことはなかった思います。国連の中のジェラシーというか、あの動きはすごいですね。ジェラシーで思い出したんですが、援助にもジェラシーってあるんですよ。もちろん援助する側にもあるんですが、受ける側のジェラシー、それで社会を崩壊させてしまうこともあります。

伊藤：あそこはもらったのに、うちはもらえないとか。

平山：そうですね。そのリスクもきちんとプロジェクトを組み立てる時に、考えておかなければいけません。その社会を私たちの援助が入ったが為に壊さないかどうか。

山口：隣の村は援助が入って、こちらの村はとか。うちもやってと言いに行けたらいいけど、言いに行けないと大変なことになりますね。

平山：ですからそれをどういう風にプラス指向に、前向きに持って行くかですね。交流してもらうように、両方から少しずつ出してお互いにやってみたらどうですかとか。今は国を越えてますから、例えばタイの中でも東北タイはラオスに近いですから、タイの中で交換するよりも国境を越えた隣り同士でやった

方がいいんですね。橋が架かったので、それを少しやり始めました。お互いに参考になることがあって。本当は日本で研修よりも ── ＡＨＩはゆっくり考えてやってますが ── 第三国研修の方がいいかなあと今は思っています。日本はＯＤＡにも３つ位型があって、物品供与と向こうの技術指導、それから日本へ呼んできてトレーニングする方法がありますが、トレーニングを受けた人たちは自国へ帰ったら自分の技術を同業者に教えないんですよ。それでお金儲けができますから。医者でも同じです。難しいです。全く役に立たないのもいっぱいありますし。それに、器具を付けて持たせると、その人にしか動かせない機械ということになってしまします。そのトレーニングは本当によくないです。でもＡＨＩなんかがやっているのは、リーダーシップトレーニングですから違いますが。

私にとって考えてみますと、やはり自分に気付くということがあります。異文化体験の中で自分に気付いてその村のことが分かって、分かってきたらまた自分に気付くというそういったサイクルのようなものがあります。まあよかったかなと思っています。

山口：イラクの調査っていうのはハーバード大学が自分たちでそれを企画するんですか。それとも国連とかから委託があるわけですか。

平山：それは個人が言い出します。大学が言い出すのではなくて、個人がハーバードの広報誌みたいなものに載せて、誰か来ませんかと。

山口：そして政策提言までする。

平山：そうです。引っ張ったのはニューヨークにあるＮＧＯでした。ハーバードのＯＢが引っ張って、保健のところはハーバードの公衆衛生、私は保健学に研究員で行っていましたので。しかも国連に持っていくわけですから、多国籍でやりたかったわけです。それでルーマニアから一人、スペインから一人、日本が私ということで。ハーバードチームは保健の方を担当して、私は栄養部門、その次は死亡率を担当しました。ヘルスインフラということで水だとか、それからヘルスファシリティというのは病院に置いてある器具がどうなっているかを調べる人という様に別れました。一人だけコロンビアの教授が入っていましたが。また、経済の方はロンドン大学の経済学部の教授が三人入って、大きなチームでやりました。非常におもしろかったですね。いろんな人とわいわい言いながら。でもやはり多国籍で難しいといつも思うことは、どれが正しいかと決められないことです。国連のジュネーブにいる時イラン・イラク戦争を担当していましたが、イランの言うことを聞いて“ああ正しい正しい”、今度イラクの言い分“ああ正しいなあ”と。両方正しいというのはどういうことだろうと、いつも考えていました。どこが悪いと言うことができないんです。あまりはっきり決めてはいけないような気がして。カオスがいい時もやっぱりあるんですね。

グラバア：どうして“皆が正しい”というふうにいられないのかなあと思いま

すし、自分が正しいと言って喧嘩しなければいいと思うのですけれど。

山口：正しいから喧嘩するんじゃないかな。きっと葛藤が起こるのはそれぞれ正しいからだからね。困ったね。

伊藤：ボスニアはもういらしたんじゃないですか。

平山：いえ行っていません。今大変なのは、東欧という新しい援助対象国が出てきたことです。今までの援助対象国、被援助国というのは暑い場所で、まあまあ皆で話し合ってやれば野菜も育つしという所なのですが、今度は寒いんです。ですから東欧に対しては新しいアプローチが必要になって、大変なところです。国が結構あるんですよね。複雑です。私も暑いのには耐えられますけど、寒いのはちょっと辛いなと思ってます。

■ハーバード大学教授との結論の相違

津村：これはオフレコなのかもしれないけど、以前平山さんから聞いたハーバードの時の調査報告の問題はどんなふうになっていますか。

平山：ああそうですね。問題になっています。ハーバードの教授が出した２年前に出したデータと、私のデータとがえらく違うんです。私は、“栄養問題はそんなに大きくない”と分析しました。ハーバードの先生が２年前にやった結果が、今の国連の全部の資料になっていますけど、私は間違いだと思っているんです。それでコンフリクトが起きていて、文章表現にして表にきちんとは出せないのです。一つのクラスターというのを調査していくのですが、このブロックからは１２、次のブロックは、という風に抽出していきます。私が見た感じでは、１２の中で栄養失調の子どもというのは１ぐらいです。１以下位ですね。ところがその先生の調査では１０人位出ているんですね。そんなはずはないんです。その問題というのは、私が勝手に自分のことをサポートして言っているのですが、顔を見ていたら分かるんです。その先生はどう見てもデータしか見ていない。ですから生物統計のプロではあっても、やはり発展途上国に慣れていないといいますか、数だけを見て、実際調査しているのはイラクの人とヨルダンの人なわけです。そのスーパービジョンがきちんとできていないと思うんです。トレーニングに時間をかけるというのは非常に大事なことで、自分はアラビア語ができないわけですから。もう一つそのチームに文句を付けたのは、やはりアラビア語のできる人を一人位入れるべきだったということです。皆できなかったんです。「こんなことないでしょ」と言ったら、「あっそうか」ってそのＮＧＯの人が言っていましたけれども。そのＮＧＯを引っ張る人も、ハーバードの博士課程を卒業して２年位しか経っていなくて、ずーっと研究畑でやって来た人です。やはりそのセンスは非常に大事だと思います。子どもの顔を見ながら調査すれば、そんなデータはどうやっても出しようがないんです。まさか２年間で体重がどーっと増えるわけありません。２年も経っていないですね、１年位です。

グラバア：顔を見てわかるっていうのは、やっぱりトレーニングなんですよ。母親になっても最初のうちは、見ただけでは子どもが本当に病気かどうかはなかなかわからない。最初はお医者様に連れて行ったらいいんだろうかどうしようかと迷うくらいだけど。まあそうそうしていると、あっ熱は出ているけど大丈夫とか、これは危ないとか見えてきます。

平山：そうですよね。でもその先生はずっと統計をやっておられて、権威なんです。それとぶつかってしまって。どう見ても子どもの状態はそんなに悪くないんです。けれども事情が事情なだけに、経済制裁を止めてもらう為には悪いデータの方がいいわけです。でも私が心配したのは、ＮＧＯだからいい加減なデータで、自分の持っていきたい方に科学のデータを曲げているというのはおかしいのではないかということです。そうでないと次の時に聞いてもらえなくなるのではないかと。今のこのイラクの問題に対してはいいとしても、次があるのでちょっとそれはまずいんじゃないかと心配しているわけです。弁護士が出てきて大変でした。向こうは英語がネイティブですからいいですけど、こちらは法律用語が出てきて、最後はそれでクタクタでした。最終的にはハーバード大学の中にプロフェッショナルコミッティというのができまして、今まだ争っています。

山口：その結論の違いについて。

平山：そうです。というのは、その先生のデータを国連全部が、下々まで使っているんですよ。ハーバードの教授が間違ったデータを出したとは言えないわけです。どうしてあんなにはっきり分かるものを間違いと認められないのかなと思います。あれはちょっと怖いです。これから国連のデータを見ても疑いたくなります。もう５０いくつでいらっしゃるんですけど、どうしていろんなところで調査しておられるのに人間の顔を見られなかったのかなあと思いますね。死亡率もおかしいんですよ。短い間に二人も子どもを流産しているとか、データがいっぱいおかしいので、ちょっと考えてみたら分かると思うんです。それも一つの苦い経験でしたけれども。

橋本：研修生で来ていました橋本恵子と申します。私の友達や、私もそうなんですけど、ワークショップっていうのはいったい何なんだろうというのをずっとここのところ考えています。人関の先生にも聞いてみたいんですけれども、今ちらっと気づきとか楽しさとかそういう言葉が出てきていましたが、平山さんの言葉でワークショップというのは結局何をする場なのでしょうか。

平山：やっぱり「発見の場」というんでしょうか。ずっと発見があるわけではないのですが、何かやっているときにキラッと何かおもしろいものが出てくる。自分の身近な問題をやっていますから、それが解決できるということですね。発見、もっと強く言えば覚醒とかになるのかも知れないですね。覚醒というのか、一人の人が気付いた時には大きな運動にはならないのですが、それこそ社会変革になるかも知れないですね。その中で２０人が気付いた時に、社会のソー

シャルノームという社会規範が変わってくるわけですよ。ですからもしかしたら、社会変革なのかも知れないですね。

伊藤：ショックだとか参加しながら気付いていくということね。なかなかそこのレベルに達しないで、ただ正面を向いてお話しを聞いて終わってしまうようなこともワークショップだという人もいますけどね。平山さんがおっしゃったのが、本来の姿だと私は思いますけど。

■人びとの考えが変わっていった体験

星野：平山さんの経験の中で、関わった人たちが具体的に変わっていった例はいくつもあったのですか。

平山：そうですね。タイの場合は水という概念がだいぶ変わりました。向こうの人は汚い水というのは頭にないというのか、私が見たらどう見てもこれは飲めないと。ぱっと見て「ボウフラが」と思うんですが、全然分からないのですね。「飲め飲め」と言ってきますから、ちょっと考えて「これ、皆飲んでいるの」という雑談から始まって、「ちょっと明日の夜集まれないかなあ」とか。「じゃあ、良い水って何だ」って向こうから言ってくるので、私はこう思うと。「じゃあ皆で話し合ってみたら」って。そこから誰が水を汲んできたとか、お宅はどうしてるお宅はどうしてるとかっていう風に聞いていきます。味の素の話でも、ベトナムでは5年前はバンバンかけていたんですね。でもそれがどれだけ体に悪い影響を与えているか、それから砂糖の量も分かってきました。例えばカルシウムが壊れていく様子を、ちょっと絵を描いて歯ががたがたになっているよとか、そういう話をしてきたら、5年後には味の素と砂糖の量がすごく減っているんですよ。皆「味の素はやめ」と、自分で言うんです。お母さんが言うから子どもも言います。いつも大人のワークショップと、学校へ行ってのスクールエデュケーションとくっつけてやります。そうすると子どもも帰ってきて「お母さんダメだよ」と言うから、それで強化されているというか。家族全部が「ダメダメダメ」と言っているとそれが社会になっていって、さらに大きな単位になって皆が「ダメ」と言っているんだからと。逆にタイなんかはヨード不足の人が多いので、ヨードの入った塩というのがあるんですね。やはりそれを取らないといけないということが、全然皆わからなかったのですが、取らないといけないということが皆の話し合いで分かってきて、それでヨードの塩を確保して皆で少しずつ取っているということもあります。ああこんなに変わったんだって。ですから1年位空けていて、自分が引いてからもずっとモニタリングをやっていくのですが、ああこんなに変わって良かったねという喜びはあります。本当は日本でもあると思いますけど。

星野：目に見えてそういう変化が感じられると、やっている方も……。

平山：嬉しいですよね。実際に現場に入った時は、どうしてこんなことが起こるのだろうと、ストレスが溜まって大変ですが。すごくゆっくりですから。ワー

クショップをやりましょうと言っても、5時間位来ないとか。5時間位ならいいですが、アフリカだと次の日になっているとか。あるいはお金を借りたら返さなくてはいけないとか。今、小さなお金を貸すというのか、小規模融資というのが流行っていて、ただ、借りて借りっぱなしではなくきちんと返さなくてはいけないことを学ぶんですね。でもお金は返さないといけないものだということが分かるのに、ずいぶん時間がかかるんです。始めはお金を借りるときのサインの仕方を2週間かけて教えます。自分のサインが同じ形にできないんです。それで2週間かかります。その後、お金はなぜ絶対返さないといけないのかということを、おとぎ話ではないですが、いろんな話に仕立てて話すとか、親しい人に作ってもらって紙芝居でやるとか、あれやこれややってみて“この世界でこういう紙芝居はダメだな”とか。バングラデシュの子どもたちは絵が描けないから、先ほど話したコンクールはダメなんですね。ですからその社会の中で何ができるかと、向こうのキャパシティというのか、できるところを発見してそれを持ち上げるというのが、それを発見するよりすごく時間がかかりますよね。よく観察するようになりました。

グラバア：絵が描けないなんて驚きました。どうして描けないんですか。

平山：描くということをやったことがないんです。私も誰でも描けると思っていました。ペンマンシップもやっていないし、線を真っすぐとか線を引くところからやって、でも全然描けなかったです。

伊藤：砂の上に描いたりもしないんですか。

平山：絵になっていないんです。線をビーと描いてそれで終わり。「丸く丸く」とか言うんですけど。どうしてこんなことできないんだろうと思うのですが、できないんですよね。

山口：確かに日本でも小さい頃からいろいろ絵を描いて、段々描けるようになっていく。

平山：私たちは教育の恩恵を受けているのが当たり前になってしまっているのですね。

伊藤：それで描けるようになりますか。

平山：だいぶ描けるようになりましたね。でもそんなに描くことに時間をかけられないので、もっとニーズの高いところに私は移り、その教える先生をトレーニングするんです。その人が育つのにまた時間がかかります。でも悠長に絵ばかり描いていられませんので、もうやめたとか。

伊藤：その効果的なものを探さなきゃだめですよね。

平山：そうですね。ですからいつも観察して、何に興味を持っているのかなあとか。でもおもしろいですね。

伊藤：お話はつきないのですが、今日はこの辺で終わらせていただきます。ありがとうございました。

資料 1

南山短期大学人間関係研究センター　研究会　97.3.17
「全てのいのちを育む地球社会を模索して」　平山恵

1．私事から－日本での異文化との出会い（関西時代）

・中津りょう子　未来塾　異文化間トレーニング
・朝鮮民族学級、オモニ・ハッキョ　in　猪飼野
・高校生が暴力団に採られる/親友を殺すということ
・凍死　in　釜が崎

2．海外での国際協力の体験から学ぶ、そして援助のあり方を考える

・'97.3.最新ベトナム＆タイ：健康と芸術＆ＡＩＤＳ患者との旅
・カリブ：地域で子供を育てる（災害、マッピング）
（・グアテマラからニカラグアまで：生きる力）
・カンボジア・タイ：保健教育（問題把握のための話し合い/水と衛生教育/快医学と薬草/AIDS対応コンドーム情報システム/学校との連携・コンクール）
・ルワンダ難民キャンプ in ザイール：ニーツ把握と「援助」の悩み
・イラク：政治と健康-高度医療国/薬漬け/輸入依存食/公正equity(貧困格差)

3．「われわれ」が地域でつくる、世界の健康　Health for All

・誰でもできるコミュニティづくりと人々の健康－ﾌﾟﾗｲﾏﾘ･ﾍﾙｽ･ｹｱ(ＰＨＣ)
＊「ＰＨＣとは、自助と自決の精神に則り地域社会または国が、開発の程度に応じて負担可能な費用の範囲内で、地域社会の個人または家族の十分な参加によって、彼らが普遍的に利用できる実用的で科学的に適正で、かつ社会的に受け入れられる手順と技術に基づいた欠くことのできないヘルス・ケアのことである。」　アルマ・アタ宣言
目標：どこでも誰でも健康な生活ができる
原則：ニーツ指向性/住民参加/地域資源の有効的活用/多分野協力
医者や看護婦でなくても国際保健協力はできる：ＧＯＢＩ－ＦＦＦなど

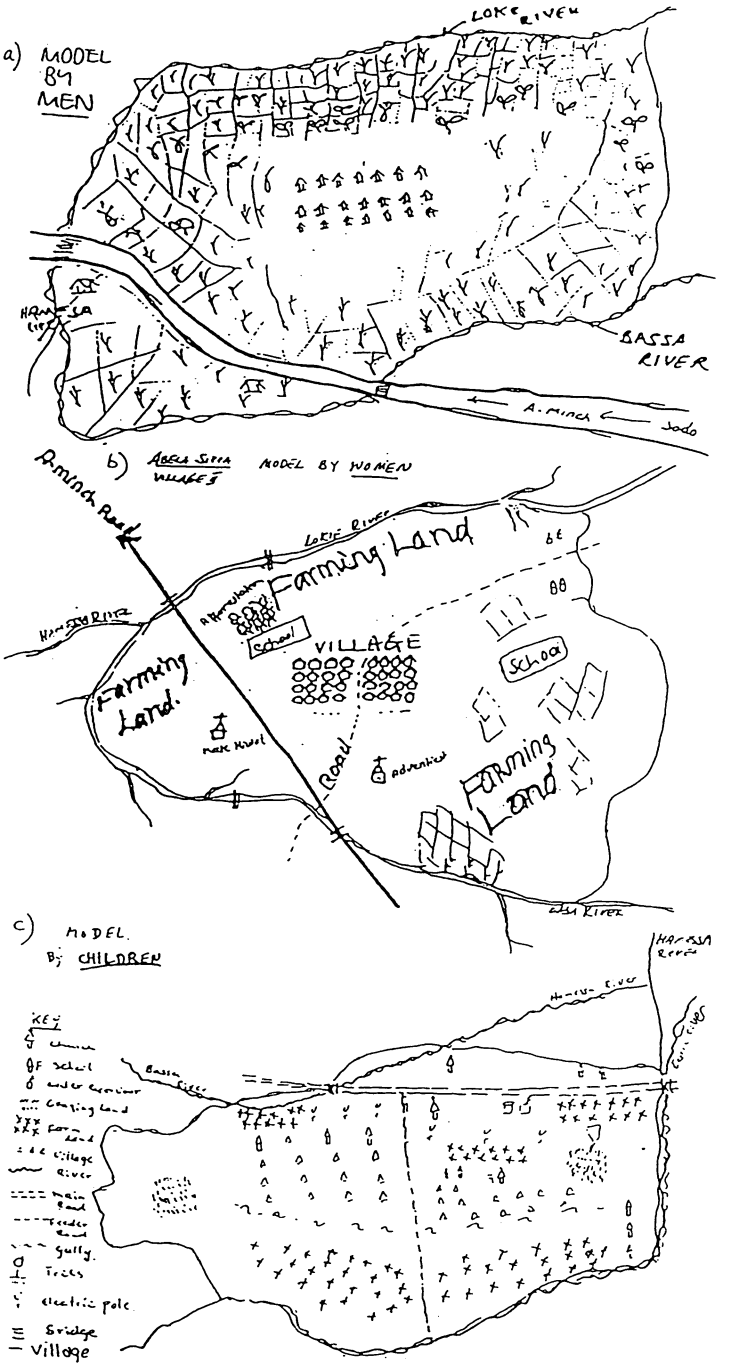
・人づくり－地域づくり　Local Capacity Building
・日本のアレルギーっ子/深呼吸ができない人々
・秋田　百笑村（自殺、農業と保健-土と体）
・食料安全保障
・援助を減らすため（南北の自立）の地域社会での生き方の再点検
・誰でもスーパードクターになれる６０点でよい「快医学」で逃げる

4．人間関係と国際協力

・「住民参加」、「パートナーシップ」を導く良きモデレーター、カタリスト（触媒）
・日本でできる国際協力がいっぱいある
・国際協力人材を育む：総合科学を楽しめる人づくりはまた楽し

資料 2

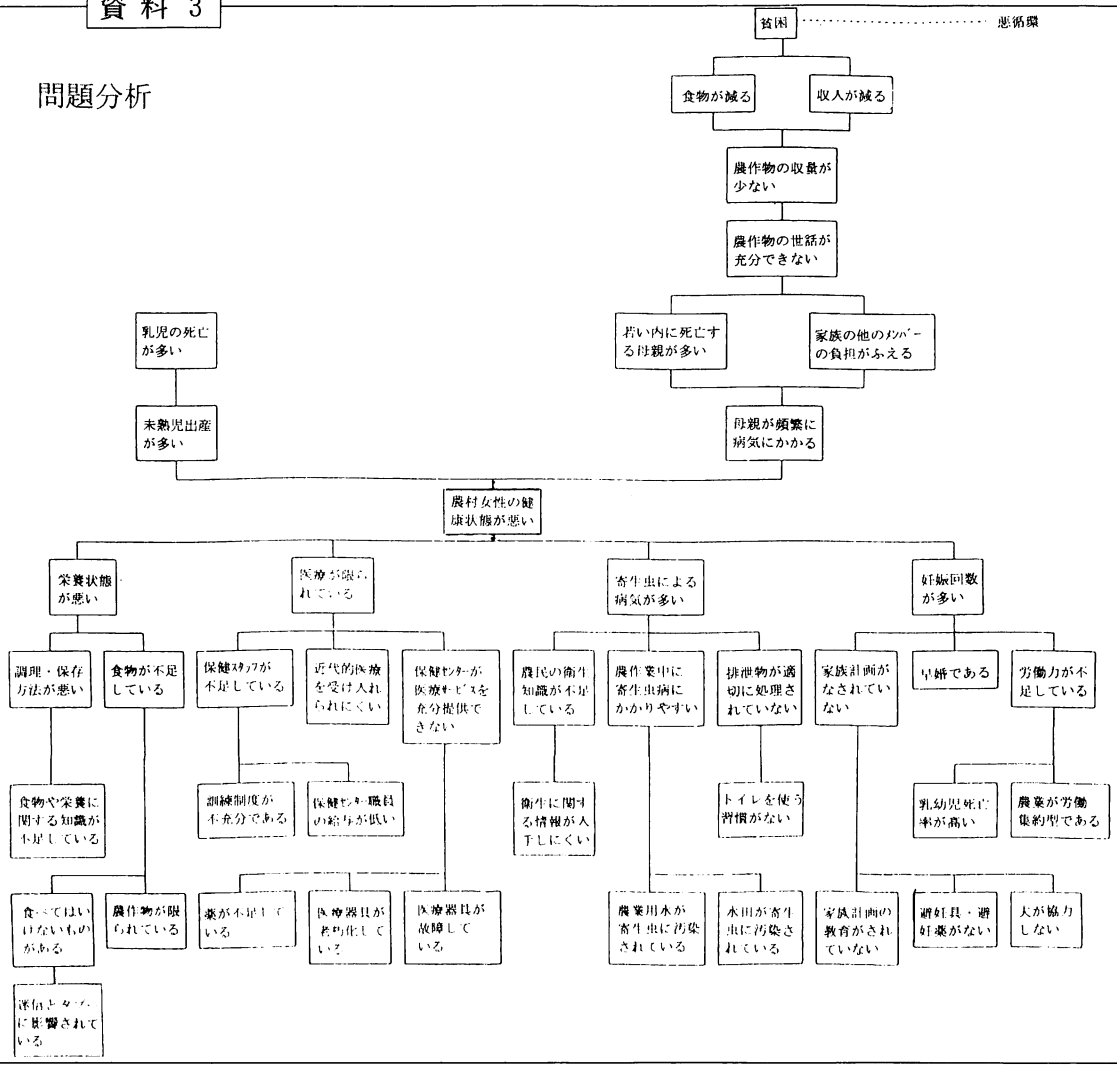
FIGURE 1. PARTICIPATORY MODELLING BY GENDER AND AGE
NORTH OMO, ETHIOPIA



(RRA Notes 14)

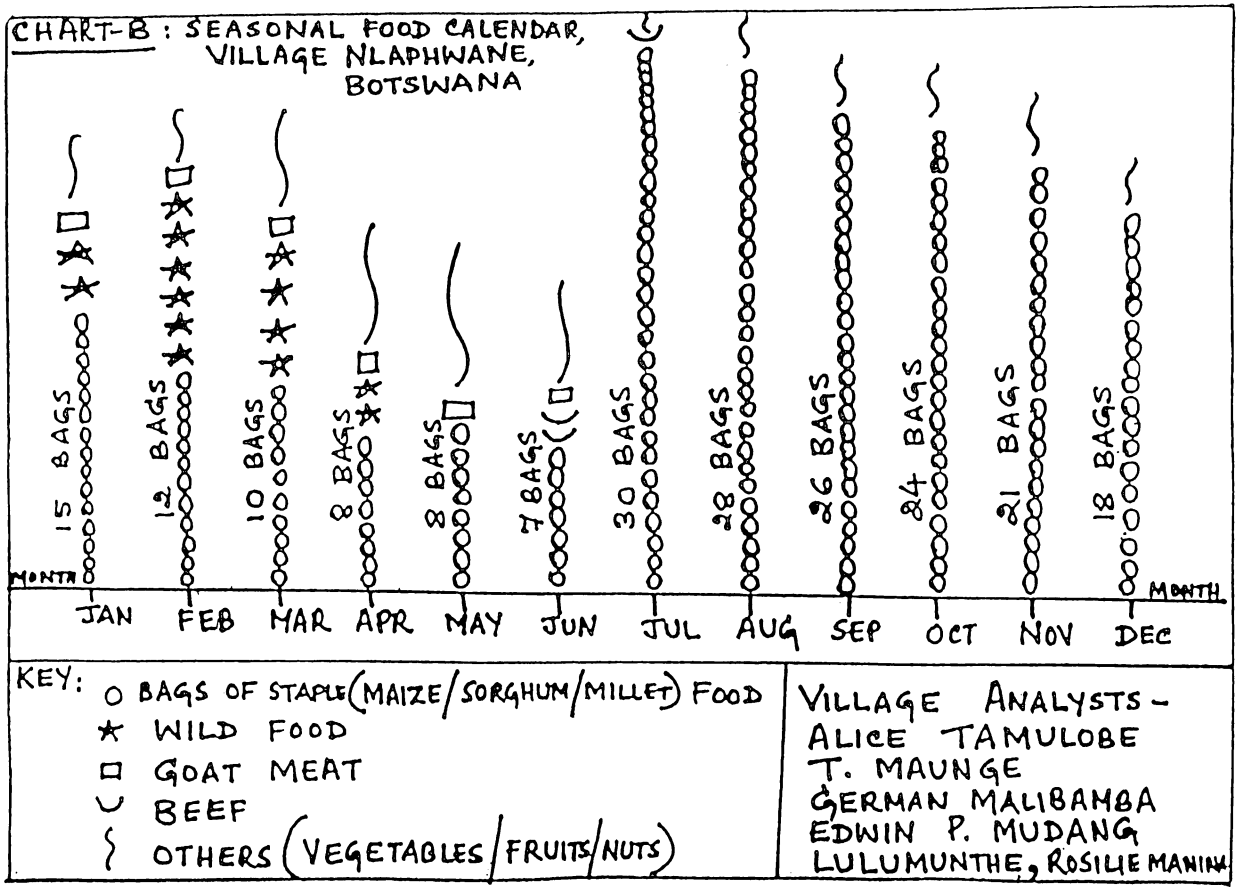
資料 3

問題分析


貧困
悪循環
食物が減る
収入が減る
農作物の収量が少ない
農作物の世話が充分できない
若い内に死亡する母親が多い
家族の他のメンバーの負担がふえる
母親が頻繁に病気にかかる
乳児の死亡が多い
未熟児出産が多い
農村女性の健康状態が悪い
栄養状態が悪い
医療が限られている
寄生虫による病気が多い
妊娠回数が多い
調理・保存方法が悪い
食物が不足している
保健スタッフが不足している
近代的医療を受け入れられにくい
保健センターが医療サービスを充分提供できない
農民の衛生知識が不足している
農作業中に寄生虫病にかかりやすい
排泄物が適切に処理されていない
家族計画がなされていない
早婚である
労働力が不足している
食物や栄養に関する知識が不足している
訓練制度が不充分である
保健センター職員の給与が低い
衛生に関する情報が入手しにくい
トイレを使う習慣がない
乳幼児死亡率が高い
農業が労働集約型である
食べてはいけないものがある
農作物が限られている
薬が不足している
医療器具が老朽化している
医療器具が故障している
農業用水が寄生虫に汚染されている
水田が寄生虫に汚染されている
家族計画の教育がされていない
避妊具・避妊薬がない
夫が協力しない
迷信とタブーに影響されている

資料 4

Figure 2. Seasonal Food Calendar: Nlaphwane Village, Botswana



(RRA Notes 20)